

悪獣篇

泉鏡花

青空文庫

つれの夫人がちよつと道寄りをしたので、銚太郎は、取附きに山門の峨々と聳えた。巨刹の石段の前に立留まって、その出て来るのを待ち合せた。

門の柱に、毎月十五十六日当山説教と貼紙した、傍に、東京……中学校水泳部合宿所とまた記してある。透して見ると、灰色の浪を、斜めに森の間にかけたような、棟の下に、薄暗い窓の数、巖穴の趣して、三人五人、小さくあちこちに人の形。脱ぎ棄てた、浴衣、襯衣、上衣など、ちらちらと渚に似て、黒く深く、

背後うしろの山まで凹なかくぼになつたのは本堂であらう。輪にして段々に点ともした蠟ろうの灯が、黄色に燃えて描いたよう。

向う側は、袖垣そでがき、枝折戸しおりど、夏草の茂きが中に早咲はやさきの秋の花。

いづれも此方こなたを背戸にして別荘だちが二三軒、廂ひさしに海原うなばらの緑を

かけて、簾すだれに沖の船を縫ぬいわせた拵こしらえ。芻釣瓶はねつるべの竹も動かかず、蚊

遣やりの煙の靡なびくもなき、夏の盛さかりの午後四時ごろ。浜辺は煮にぎえて賑にぎやか

に、町は寂しい樹蔭こかげの細道、たらたら坂ざかを下りて来た、前途ゆくては石

垣から折曲る、しばらくここに窪くぼんだ処、ちようどその寺の苔蒸こけむ

した青黒い段の下、小溝こみぞがあつて、しほまぬ月草、紺青の空が漏

れ透くかと、露もはらはらとこぼれ咲いて、藪やぶは自然の寺の垣。

ちようどそのたらたら坂を下りた、この竹藪たけくさのはずれに、草鞋わらじ、

草履、駄菓子の箱など店に並べた、屋根は茅かやぶきの、且つ破れ、且つ古びて、幾いく秋あきの月や映さし、雨や漏りけん。入口の土間なんど、いにしえの沼の干かたまつたをそのままらしい。廂は縦に、壁は横に、今も屋台は浮き沈み、危あやうく掘ほ立たての、柱々、放ばなれ放なれに傾かいているのを、渠かれは何心なく見て過ぎた。連れはその店へ寄つたのである。

「昔……昔、浦島は、小児こどもの捉とえし亀を見て、あわれと思ひ買ひ取りて、……」と、誦すむともなく口にしたのは、別荘のあたりの夕間暮れに、村の小児等こどもらの唱うのを聞き覚えが、折から心に移つたのである。

銚太郎は、ふと手にした巻まきたたばこばこ 蓑まに心着いて、唄をやめた。

「早附木マツチを買いに入ったのかな。」

うっかりして立ったのが、小店こみせの方に目かたを注いで、

「ああ、そうかも知れん。」と夏帽うなずの中で、頷うなずいて独言ひとりごと。

別に心に留めもせず、何の気もなくなると、つい、うかうかと口へ出る。

「一日あるひ大きな亀が出て、か。もうしもうし浦島さん——」

帽を傾け、顔を上げたが、藪みちに並んで立ったのでは、此方こなたの袖に隠れるので、路みちを対方むこうへ。別荘ななめの袖垣ななめから、斜ななめに坂の方を透えんかして見ると、連つれの浴衣は、その、ほの暗い小店えんに艶えんなり。

「何をしているんだらう。もうしもうし浦島さん……じやない、浦子さんだ。」

と破顔しつつ、帽のふちに手をかけて、伸び上るようにしたけれども、軒を離れそうにもせぬのであった。

「店ぐるみ総じまいにして、一箇ひとつ々々袋へ入れたって、もう片が附く時分じゃないか。」

とつぶや眩まじめくうちに真面目まじめになった、銚太郎は我ながら、

「串じょうだん戯あそびじゃない、手間が取れる。どうしたんだろう、おかしいな。」

二

とは思ったが、歴ありあり々かしこ彼処かしこに、何の異状いたずなくイんだのが見える

から、憂慮きづかうにも及ぶまい。念のために声を懸けて呼ぼうにも、この真昼間まつびるま。見える処つれに連を置いて、おおいおおいも茶番らしい、殊おんなに婦人ではあるし、と思う。

今にも来そうで、出向く気もせず。火のない巻まきたばこ 蓑たけやぶを手にしたまま、同じ処そなたにゐんで、じつと其方を。

何なんとなくぼんやりして、ああ、家も、路みちも、寺も、竹藪たけやぶを漏あおぞらる蒼空ながら、地つちの底の世にもなりはせずや、連つれは浴衣そめいの染ろ色も、浅あじさいき紫陽花の花こみぞになって、小溝やみおもかけの暗こみぞに俤やみおもかけのみ。我はこの

まま石おんなになつて、と氣の遠くなつた時、はつと足が出て、風が出て、婦人おんなは軒おんなを離れて出た。

小走りに急いで来る、青葉の中に寄る浪のはらはらと爪つまさき尖白

く、濃い黒髪の房やかな双の鬢、浅葱の紐に結び果てず、海水帽を絞つて被つた、豊かな頬に艶やかに靡いて、色の白いが薄化粧。水色縮緬の蹴出の褌、はらはら蓮の荅を捌いて、素足ながら清らかに、草履ばきの埃も立たず、急いで迎えた少年に、ばつたりと藪の前。

「叔母さん、」

と声をかけて、と見るとこれが音に聞えた、燃るような朱の唇、ものいいたさを先んじられて紅梅の花揺ぐよう。黒目勝の清しやかに、美しくすなおな眉の、濃きにや過ぐると煙つたのは、五つかづき日月に青柳の影やや深き趣あり。浦子というは二十七。

豪商狭島の令室で、銚太郎には叔母に当る。

この路を去る十二三町、停車場寄の海岸に、石垣高く松を繞らし、廊下で繋いで三棟に分けた、門には新築の長屋があつて、手車の車夫の控える身しんしやう上。

裳もすそを厭いとう砂ならば路に黄金こがねを敷きもせん、空色の洋服の褌を取つた姿さえ、身にかなえば唐からめかで、羽衣着たりと持て囃はやすを、白襟かさねで襲衣かさねの折うすものから、羅あやに綾の帯の時、湯上りの白粉おしろいに扱しご帯は何というやらん。この人のためならば、このあたりの浜の名も、狭島とが浦と称とえつびよう、リボンかけたる、笄こうがいしたる、夏の女の多い中に、海第一と聞えた美女たおやめ。

帽子うちの裡うちの日の蔭に、長いまつげのせいならず、甥おいを見た目にさえ冴えがなく、顔の色も薄く曇つて、

「銑さん。」

とばかり云った、浴衣の胸は呼吸いきぜわしい。

「どうしたんです、何を買っていらしたんです。吃驚びっくりするほど長かった。」

打見うちみに何の仔細しさいはなきが、物怖ものおじしたらしい叔母さまの状さまを、たか

だか例の毛虫のんきだろう、と笑いながら言う顔を、情なさけらしく熟じつと見て、

「まあ、呑氣のんきらしい、早附マツチ木を取って上げたんじゃありませんか。」

はじめで、ほツとした様子。

「頂戴！ いくつかの靴以来です。こうは叔母さんでなくツちや出来来ない事です。僕もそうだろうと思つたんです。」

「そうだろうじゃありませんわ。」

「じゃ、早附木ではないんですか。」

三

「いいえ、銚さんが煙草たばこを出すと、早附木マツチがないから、打棄うちちやつておくと、またいつものように、煙草には思い遣りやがない、監督のようだななんて云うだろうと思つて、氣を利かして、ちようど、あの店で、」

と身を横に、踵かかとを浮かして、恐いもののように振返つて、

「見附かったからね、黙つて買つて上げようと思つて入つたんで

すがね、お庇かけで大変な思いをしたんですよ。ああ、恐かった。」

とそのままには足も進まず、がツかりしたような風情である。

「何が、叔母さん。この日中ひなかに何が恐いんです。大方また毛虫でしよう、大丈夫、毛虫は追駈おっかけては来ませんから。」

「毛虫どころじゃありません。」

と浦子は後見うしろらるる状さま。声も低う、

「銚さん、よつぽどの間だったでしょう。」

「ぎツと一時間……」

半分は懸直かけねだったのに、夫人はかえってさもありそうに、

「そうでしたかねえ、私はもつとかと思つたくらい。いつ、店を出られるだろう、と心細いツたらなかつたよ。」

「なぜ、どうしたんですね、一体。」

「まあ、そろそろ歩行あるきましょう。何だか気草きくたび臥れでもしたよう
で、頭も脚もふらふらします。」

歩を移すのに引添うて、身体からだで庇かばうがごとくにしつつ、

「ほんとに驚いたんですか。そういうえば、顔の色もよくないよう
ですよ。」

「そうでしよう、悚然ぞっとして、未だいまに寒気がしますもの。」

と肩すほを窄めて俯向うつむいた、海水帽も前下り、頸うなじ白く悄しおれて連立つ。

少年は顔を斜めに、近々と帽の中。

「まったく色が悪い。どうも毛虫ではないようですね。」

これには答えず、やや石段の前を通った。

しばらくして、

「銚さん、」

「ええ、」

「かえり帰途に、またここを通るんですか。」

「通りますよ。」

「どうしても通らねば不可いけませんかねえ、どこぞ他ほかに路がないんでしようか。」

「海ならあります。ここいらは叔母さん、海岸の一筋路わかれみちですから、
岐路うしろといつては背後の山へ行くより他ほかにはないんですが、」

「困りましたねえ。」

と、つくづく云う。

「何ね、時刻に因つて、汐しおの干ている時は、この別荘の前なんか、岩を飛んで渡られますがね、この節の月じゃどうですか、晩方干ないかも知れません。」

「船はありますか。」

「そうですね、渡わた船ぶねツて別にありはしますまいけれど、頼んだら出してくれないこともないでしょう、さきへ行つて聞いて見ましょう。」

「そうですね。」

「何、叔母さんさえ信用するんなら、船だけ借りて、漕こぐことは僕にも漕げます。僕じゃ危けん険のんだというでしょう。」

「何なんでも可ようござんすから、銑せんさん、貴あなた郎らう、どうかして下さい。」

私はもう帰途かえりにあの店の前を通りたくないんです。」

とまた俯向うつむいたが恐こわ々ごわらしい。

「叔母さん、まあ、一体、何ですか。」と、余りの事に微笑ほほえみながら。

四

「もう聞えやしますまいね。」

と憚はばかる所あるらしく、声もこの時なお低い。

「何が、どこで、叔母さん。」

「あすこまで、」

「ああ！ 汚きたなみせ店へ、」

「大きな声をなさんなよ。」と吃驚びっくりしたように慌あわただしく、瞳ひとみを据えて、密そつという。

「何が聞えるもんですか。」

「じゃあね、言いますけれど、銚しやうさん、私がね、今、早附マツチ木を買いに入ると、誰も居ないのよ。」

「へい？」

「下さいな、下さいなツて、そういうとね。穴が開いて、こわれごわれで、鼠ねずみの家の三階建さんかいけんのような、取附とつつきの三段さんだんの古棚ふるしろの背せのね、物置もの置きみたいな暗い中から、——藻屑もくずを曳ひいたかと思う、汚ない服装ふくそうの、小さな婆ばあさんがね、よぼよぼと出て来たんです。

髪の毛が真白まっしろでね、かれこれ八十にもなろうかというんだけれど、その割には皺しわがないの、……顔に。……身体からだは痩やせて骨ばかり、そしてね、骨が、くなくと柔らかそうに腰を曲げてさ。

天窓あたまでもものを見るてツたように、白髪しらかを振って、ふツふツと息をして、脊の低いのが、そうやって、胸を折ったから、そこらを這はうようにして店へ来るじやありませんか。

早附木を下さいなツて、云ったけれど聞えませんが。もつともね、はじめから聞えないのは覚悟だというように、顔を上げてね、人の顔を視ながめてさ。目で承りましょうと云うんじゃないの。

お婆さん、早附木を下さい、早附木を、といった、私の唇の動くのを、熟じっと視しめていたツけがね。

その顔を上げていゝるのが大儀そうに、またがツくり俯向くと、

白髪の中から耳の上へ、長く、干からびた腕を出したんですがね、
掌てのひらが大きいがらの。

それをね、けだるそうに、ふらふらとふつて、
片かた々かたの人指ひとさし

ゆびで、こうね、左の耳を教えるでしょう。

聞えないと云うのかね、そんなら可ようござんす。私は何だか一目見ると、厭いやな心持がしたんですからね、買いわずと可いいから、そのまま店を出ようと思つと、またそう行ゆかなくなりましたわ。

弱るじやありませんか、婆さんがね、けだるそうに腰を伸ばして、耳を、私の顔の傍そばへ横向けに差しつけたんです。

ぷんと臭におつたの。何とも言えない、きなツくさいような、醬おした

油の焦げるような、厭に臭いよ。」

「や、そりや困りましたね。」と、これを聞いて少年も顰ひそんだのである。

「早附木を下さい。

(はあ?)

(早附木よ、お婆さん。)

(はあ?)

はあツて云うきりなの。目を眠つて、口を開けてさ、臭うでしよう。

(早附木、)ツて私は、まったくよ。銑みまわさん、泣きたくなつたの。ただもう遁にげ出したくツてね、そこいらみまわすけれど、貴あなた下の姿

も見えなかつたんですもの。

はあ、長い間よ。

それでもようよう聞えたと見えてね、口をむぐむぐとさして合がつてん
点々をしたから、また手間を取らないようにと、直ぐにね、
銅貨を一つ渡してやると、しばらくして、早附木を一ダース。

そんなには要らないから、包を破いて、自分で一つだけ取つて、
ああ、厄落し、と出よう、とすると、しっかりとこの、「

と片手を下に、袖をかさねた袂たもとを揺ゆつたが、気味悪そうに、胸
をかわして密そつと払い、

「袂をつかまえたのに、引張られて動けないじゃありませんか。」
「かさねがさね、成程、はあ、それから、」

五

「私や、銚さん、どうしようかと思つたんです。

何にも云わないで、ぐんぐん引張つて、かぶりを掉ふるから、大方、剩つり錢よこを寄越よこそうというんでしようと思つて、留りますとね。

ヤツと安心したように手を放して、それから向う向きになつて、緡さしから穴のあいたのを一つ一つ。

それがまたしばらくなの。

私の手を引張るようにして、てのひらく掌へ呉くれました。

ひやりとしたけれど、そればかりなら可よかつたのに。

(御新姐様ごしんぞさまや)「

と浦子の声、異様に震えて聞えたので、

「ええ、その婆ばばが、」

「あれ、銚ちやうさん、聞えますよ。」と、一ひと歩あしいそがわしく、ぴつたり寄添う。

「その婆が、云ったんですか。」

夫人はまた吐息をついた。

「婆ばあさんがね、ああ。」

(御新姐様や、御身おみア、すいたららしい人じゃでの、安く、なかまの値で進ぜるぞい。)ツて、皺しわ枯がれた声でそう云うとね、ぶんと頭へ響いたんです。

そして、すいたらしいツてね、私の手首を熟と握って、真黄色な、平たい、小さな顔を振上げて、じろじろと見詰めたの。

その握った手の冷たい事ツたら、まるで氷のようじゃありませんか。そして目がね、黄金目なんです。

光ったわ！ 貴郎。

キラキラと、その凄かった事。」

とばかりで重そうな頭を上げて、俄かに黒雲や起ると思う、憂慮わしげに仰いで視めた。空ざまに目も恍惚、紐を結えた頃の震うが見えたり。

「心持でしよう。」

「いいえ、じろりと見られた時は、その目の光で私の顔が黄色に

なつたかと思うくらいでしたよ。灯あかりに近いと、赤くほてるような気がするのと同おんなじ一いちに。

もう私わたし、二ふた一すじ条針を刺されたように、背中の両方から悚然ぞつとして、足もふらふらになりました。

夢中で二三間駈げんかけ出すとね、ちやらんと音がしたので、またハツと思ひましたよ。お銭あしを落したのが先方さきへ聞えやしまいかと思つて。

何でも一大事のように返した剩銭つりなんですもの、落したのを知つては追っかけて来かねやしません。銚すいさん、まあ、何てこつてしよう、どうした婆さんでしようねえ。」

されば叔母上の宣のたまうごとし。年紀とし七なな十そじあまりの、髪まの真ま白しろ

な、顔の扁ひらたい、年紀の割に皺しわの少い、色の黄な、耳の遠い、身体からだの臭におう、骨の軟かそうな、挙動ふるまいのなくなした、なおその言ことばに従えば、金色こんじきに目の光る嫗おうなとより、銑太郎は他に答すべうる術を知らなかつた。

ただその、早附木マツチ一つ買い取るのに、半時ばかり経たつた仔細しさいが知れて、疑うたがいはさらりとなくなつたばかりであるから、氣の毒らしい、と自分で思うほど一向な暢氣のんき。

「早附木は？ 叔母さん。」と魅せられたものの背中を一つ、トんと打つようなのを唐突だしぬけに言つた。

「ああ、そうでした。」

と心着くと、これを嫗に握られた、買物を持った右の手は、ま

だ左の袂たもとの下に包んだままで、撫なで肩がたの衿ゆきをなぞえに、浴衣の筋も水に濡れたかと、ひたひたとしおれて、片袖しるく、悚然ぞっとしたのがそのままである。大事なことを見るがごとく、密そつとはずすと、銚太郎も覗のぞくように目を注いだ。

「おや！」

「……………」

六

黒しほりの唐繻子とうじゆすと、薄うす鼠ねずみに納戸がかつた絹ちぢみに宝づくしの絞しぼりの入った、腹合せの帯を漏れた、水ときいろ紅色いろの扱しご帯きにのせて、美

しき手は芙蓉ふようの花片はなびら、風もさそわず無事であつたが、キラリと輝いた指環ゆびわの他に、早附木ほからしいものの形も無い。

視詰みつめて、夫人は、

「……………」ものも得えいわぬのである。

「ああ、剩銭つりと一所に遺失おとしたんだ。叔母さんどの辺？」
と気早きばやに向き返つて行ゆこうとする。

「お待ちなさいよ。」

と遮つて上げた手の、仔細しさいなく動いたのを、嬉しそうに、少年の肩にかけて、見直して呼吸いきをついて、

「銚さん、お止よしなさいお止しなさい、気味が悪いから、ね、お止しなさい。」

ときも一生懸命。おき 圧えぬばかりに引留めて、

「あんなものは、今頃何に化なっているか分りませんよ、よう、ですから、銚さん。」

「じゃ止します、止しますがね。」

少年は余りの事に、

「ははははは、何だか妖物ばけものでもあるようだ。」と半ばつぶや呟いて、また笑った。

「私は妖物としか考えないの、まさか居ようとは思われないけれど。」

「妖物ですとも、妖物ですがね、そのくなくなした処あたるや、天窓あたまで歩ある行きそうにする処から、黄色くうね※った処なんぞ、何の事はない

婆ばばの毛虫だ。毛虫の婆ばあさんです。」

「厭いやですことねえ。」と身ぶるいする。

「何もそんなに、気味を悪がるには当たらないじやありませんか。その婆に手を握られたのと、もしか樹の上から、」

と上を見る。藪やぶは尽きて高い石垣、榎えのきが空にかぶさつて、浴衣に薄き日の光、二人は月夜を行く姿。

「ほたりと落ちて、毛虫が頸筋くびすじへ入ったとすると、叔母さん、どっちが厭な心持だと思います。」

「沢山よ、銚さん、私はもう、」

「いえ、まあ、どっちが気味が悪いんですね。」

「そりや、だって、そうねえ、どっちがどっちとも言えませんね

。」「

「そら御覧なさい。」

説き得て可^よしと思える状^{さま}して、

「叔母さんは、その婆を、妖物か何ぞのように大騒ぎを遣^やるけれど、気味の悪い、厭な感じ。」

感じ、と声に力を入れて、

「感じというと、何だか先生の仮^{こわいろ}声のようですね。」

「気楽なことをおっしゃいよ！」

「だって、そうじゃありませんか、その気味の悪い、厭な感じ、」

「でも先生は、工合^{ぐあい}の可^いいとか、妙なとか、おもしろい感じって事は、お言いなさるけれど、気味の悪いだの、厭な感じだのって、

そんな事は、めったにお言いなさることはありません。」

「しかしですね、詰つまらない婆を見て、震えるほど恐こわがった、叔母さんの風ふうツたら……工合の可いい、妙な、おもしろい感じがする、と言ったら、叔母さんは怒るでしょう。」

「当あたりまえ然なですわ、貴あなた郎。」

「だからこの場合ですもの。やっぱり厭な感じだ。その気味の悪い感じというのが、毛虫とおなじくらいだと思っただろうです。別に不思議なことは無いじゃありませんか。毛虫は気味が悪い、けれども怪あやしいものでも何でもない。」

「そう言えばそうですけれど、だって婆さんの、その目が、ねえ

。」

「毛虫にだって、睨にらまれて御覧なさい。」

「もじやもじやと白髪しらが、貴郎。」

「毛虫というくらいです、もじやもじやどころなもんですか、沢山毛がある。」

「まあ、貴下あなたの言うことは、蝸でんでん牛むしの狂言のようだよ。」と寂しく笑ったが、

「あれ、」

寺でカンカンと鉦かねを鳴らした。

「ああ、この路の長かったこと。」

釣棹つりざおを、ト肩かたにかけて、処士ともしあり。年紀としのころ三十四五。五ご分ぶ刈かりのなだらかなるが、小鬢こびんさきへ少し兀はげた、額ひたいの広い、目のやさしい、眉まゆの太い、引ひ緊きつた口くちの、やや大きいのも凜り々りしいが、頬ほ肉おしが厚あく、小鼻こびに笑えましげな皺しわ深く、下した頤あごから耳みみの根ねへ、べたりと髯ひげのあとの黒くろいのも柔和じやうわである。白地あに藍あの縦たて縞しまの、縮ちぢみみの襦し衣やつを着きて、襟えりのこはぜも見えそうに、衣紋えもんを寛ゆるくこ紺こん縞が、二ふた三さん度ど水みづへ入いつたろう、色いろは薄うすく地じも透といたが、糊のり沢たく山さんの折を目め高たか。

薩摩さつ下ま駄たの小倉こくらの緒お、太おいしつかりしたおやゆびで、蝮まむしを拵こしらえねばならぬほど、弛ゆるいばかりか、歪ゆがんだのは、水みづに對たいして石いしの上うへ

に、これを台にしていたのであった。

時に、釣れましたか、獲物を入れて、片手に提ぐべき畚は、十八九の少年の、洋服を着たのが、代りに持つて、連立つて、海からそよそよと吹く風に、山へ、さらさらと、蘆の葉の青く揃つて、二尺ばかり靡く方へ、岸づたいに夕日を背。峰を離れて、一刷の薄雲を出て玉のごとき、月に向つて帰途、ぶらりぶらりということは、この人よりぞはじまりける。

「賢君、君の山越えの企ては、大層帰りが早かったですな。」
少年は莞爾やかに、

「それでも一抱えほど山百合を折つて来ました。帰つて御覧なさい、そりや綺麗です。母の部屋へも、先生の床の間へも、ちゃん

と活けるように言つて来ました。」

「はあ、それは難ありがた有いい。朝なんざ崖がけに湧わく雲の中にちらちら燃えるようなのが見えて、もみじに朝霧がかかったという工合でいて、何となく高峰たかねの花という感じがしたのに、賢君の丹精で、机の上に活かしたのは感謝する。

早く行つて拝見しよう、……が、また誰か、台所の方で、私の帰るのを待っているものはなかつたですか。」

と小鼻の左右の線を深く、微笑を含んで少年を。

顔を見合わせて此方こなたも笑い、

「はははは、松が大層待っていました。先生のお肴さかなを頂うこうと思つて、お午飯ひるも控えたつて言っていましたつけ。」

「それだ。なかなか人が悪い。」広い額に手を加える。

「それに、母も、先生。お土産を楽しみにして、お腹をすかして帰るからって、言づけをしたそうです。」

「益々恐縮ますます。はあ、で、奥さんはどこかへお出かけで。」

「銚さんが一所だそうです。」

「そうすると、その連つれの人も、同じく土産を待つ方なんだ。」

「勿論です。今日ばかりは途中で叔母さんに何にも強請ねだらない。

犬川で帰って来て、先生の御馳走ごちそうになるんですって。」

とまた顔を見る。

この時、先生愕然がくぜんとして頸うなじをすくめた。

「あかぬ！ 包囲攻撃じゃ、恐るべきだね。就中なかんずく、銚太郎な

どは、自分釣棹をねだつて、貴郎あなたが何です、と一言の下もとに叔母御おばごに拒絶された怨うらみがあるから、その祟たたり容易ならずと可知しるべし矣。」

と蘆の葉ずれに棹を垂れて、思わず観念の眼まなこを塞ふさげば、少年は氣の毒そうに、

「先生、買つていらつしやい。」

「買う?」

「だつて一尾びきも居ないんですもの。」

と今更ながら畚びくを覗のぞくと、冷つめたい磯いその香においがして、ざらざらと隅いに固まるものあり、方丈記に曰いわく、ごうなは小さき貝を好む。

先生は見ざる真似まねして、少年が手に傾けた件の畚くたんびくを横目に、

「生憎あいにく、沙魚はぜ、海津かいづ、小鮒こふななどを商う魚屋がなくなつて困る。奥

さんは何も知らず、銚太郎なお欺くべしじやが、あの、お松というのが、また悪く下情かじように通じておつて、ごうなや川蝦かわえびで、鱒あじやおぼこの釣れないことは心得ておるから。これで魚屋へ寄るのは、落語の権助が川狩の土産に、過つて蒲鉾かまぼこと目刺を買つたより一層の愚じや。

特に餌えきの中でも、御馳走の川蝦は、あの松がしんせつに、そこから掬すくつて来てくれたんで、それをちぎつて釣る時分は、浮木うきが水面に届くか届かぬに、ちよろり、かはず奴めが攫さらつてしまう。

大切な蝦五つ、瞬く間にしてやられて、ごうなになると、糸も動かさないなどは、誠に恥入るです。

私は賢君が知つとる通り、ただ釣という事におもしろい感じを持つて行^やるのじゃで、釣れようが釣れまいが、トンとそんな事に頓^{とんちやく}着はない。

次第に因つたら、針もつけず、餌なしに試みて可^いのじゃけれど、それでは余り賢人めかすようで、氣^{きとがめ}咎^{とが}がするから、成るべく餌も附^{くつ}着けて釣る。獲物の有^{ありなし}無^{なし}でおもしろ味^{かわり}に変はないで、またこの空^{からびく}畚^{びん}をぶらさげて、蘆^{あし}の中を釣^{つりざお}棹^{さお}を担^{かか}いだ処も、工合の可^いい感じがするのじゃがね。

その様子では、諸君に對して、とてもこのまま、棹^{さお}を掉^ふつては

歸られん。

釣を試みたいと云うと、奥様が過分な道具を調べて下すつた。この七本竹の継棹つぎざおなんぞ、私には勿もつたい体ないと思うたが、こういう時は役に立つ。

一つ畳み込んで懐ふところ中へ入れるとしよう、賢君、ちよつとそこへ休もうではないか。」

と月を見て立たちどま停つた、山の裾すそに小川を控えて、蘆が吐き出した茶店が一軒。薄い煙に包まれて、茶は沸いていそうだけれど、葦よしず箆張ばりがぼんやりして、かかる天氣に、何事ぞ、雨露に朽ちたりな。

「可いいじゃありませんか、先生、畚は僕が持っていますから、松

なんぞ愚^ぐ図^ぐ々^ぐ々^ぐ言^ぐつたら、ぶツつけてやります。」

無二の味方で頼^{たの}母^{もの}しく慰^{なぐさ}めた。

「いやまた、こう辟^へ易^きして、棹^{しやく}を畳^{たた}んで、懐^ふ中^{ところ}へ了^{しま}い込んで、煙^き管^{せる}筒^{づつ}を忘^{わす}れた、という顔^{かほ}で帰^{かへ}る処^{ところ}もおもしろい感じ^{かんじ}がするで。

それに咽^の喉^ども乾^{かわ}いた、茶^{ちや}を一つ飲^のみましよう。まず休^{やす}んで、」

と三^み足^{あし}ばかり、路^{みち}を横^{よこ}へ、茶^{ちや}店^{てん}の前^{まへ}の、一^{いっ}間^{かん}ばかり蘆^{あし}が左^{ひだり}右^{みぎ}へ分^われていた、根^ねが白^{しろ}く濡^ぬ地^{れち}が透^{とお}いて見^みえて、ぶくぶくと蟹^{かに}の穴^{あな}、うたかたのあわれを吹^ふいて、茜^{あか}がさ^ねして、日^ひは未^{いま}だ高^{たか}いが虫^{むし}の聲^{こゑ}、艚^ろを漕^こぐように、ギイ、ギツチヨツ、チヨ。

「さあ、お掛^かけ。」

と少年^{せうねん}を、自^じ分^{ぶん}の床^{しょう}几^ぎの傍^{わき}に居^おらせて、先^{せん}生^{せい}は乾^{かわ}くと言^いった、

その唇を撫でながら、

「茶を一つ下さらんか。」

暗い中から白い服装、麻の葉いろの巻つけ帯で、草履の音、ひた——ひた、と客を見て早や用意をしたか、
 盆りほんに、朝顔茶碗の亀裂ひびだらけ、茶渋で錆さびたのを二つのせて、

「あがりまし、」

と据えて出し、腰かがを屈おめた嫗おうなを見よ。一筋ごとに美しく櫛くしの齒くを入れたように、毛筋が透とおつて、生はえぎわ際の揃とつた、柔かな、茶にやや褐かばを帯びた髪の色。黒き毛、白髪しろがの塵ちりばかりをも交まじえぬを、切きりかみ髪かみにプツリと下げた、色の白い、艶つやのある、細ほそおもて面おとがけの頤か尖たがつて、鼻筋の衝つと通つた、どこかに気高い処のある、年とし紀じは誰たが

目も同一……である。

九

「渺々乎びようびようことして、蘆あしじや。お婆さん、好景色いだね。二三度来て見た処ぢやけれど、この店の工合いが可いせいか、今日は格別に広く感じる。」

この海ほかの他に、またこんな海があるろうとは思えんくらいじや。」
と頷うなずくように茶を一口。茶碗にかかるほど、襯衣しやつの袖ふくの膨らかなので、搔抱かいだく体ていに茶碗を持つて。

少年はうしろ向むきに、山を視ながめて、おつきあいという顔かおつき色。先

生の影二尺を隔てず、窮屈そうにただもじもじ。

おうな 嫗は威儀正しく、膝ひざのあたりまで手を垂れて、

「はい、申されまする通り、世がまだ開けませぬ泥沼の時のよう
な蘆原あしはらでござるわや。

この川かわ沿ぞいは、どこもかしこも、蘆が生えてあるなれど、私わしが
小家こいえのまわりには、また多いう茂こつてござる。

秋にもなつて見やしやりませ。丈が高う、穂が伸びて、小屋は
屋根に包まれる、山の懐も隠れるけに、月も葉の中から出でさされ
て、蟹かにが茎あがへ上つての、岡沙魚おかはぜというものが根の処で跳ねるわや、
漕こいで入る船の艫ろかいの音も、水の底に陰気に聞えて、寂しくなる
がの。その時稲が実るでござって、お日ひより和じや、今年は、作も豊

年そうにござります。

もう、このように古い朽ちて、あとを頂く御菩薩ごぼさつの粒も、五つ七つと、算かぞえるようになったれども、生しょうあるものは浅間あさましゆうての、蘆の茂るを見るにつけても、稲の太るが嬉しゆうてなりませぬ、はい、はい。」

と細いが聞くものの耳に響く、透とおる声で言いながら、どこをどうしたら笑えよう、辛き浮世の汐しおかぜ風かぜに、冷つめたく大理石になつたよ
うな、その仏造つた顔に、寂しげに莞爾にっこり笑つた。鉄漿かねを含んだ歯
が揃つて、貝のように美しい。それとなお目についたは、顔の色
の白いのに、その眠つたよほそうな織ほそい目の、紅くれなの糸、と見るばかり、
赤く線を引いていたのである。

「成程、はあ、いかにも、」

と言つたばかり、ことば 嫗の言は、この景に対するものをして、約半時の間、未来の秋を想像せしむるに余りあつて、先生は手なる茶碗を下にも措おかず、しばらく蘆を見て、やがてその穂の人の丈よりも高かるべきを思い、白泡のずぶずぶと、濡土ぬれつちに眩つぶやく蟹の、やがてさらさらと穂よに攀よじて、鋏はさみに月を招くやなど、茫ぼう然ぜんとして視ながめたのであつた。

蘆の中に路があつて、さらさらと葉ずれの音、葦よしず簣すの外へまた一人、黒きい衣ものの嫗が出て来た。

茶色の帯を前結び、肩の幅広く、身もやや肥えて、髪はまだ黒かつたが、薄すさは条すじを揃すえたばかり。生はえぎわ際わが抜け上つつて頭むりの半

ばから引詰めた、ぼんのくどにて小さなおぼこに、櫛の形の筭さ
 した、片頬かたほや痩せて、片頬かたほくと肥く、目も鼻も口も頤あごも、いびつ形なりゆがに曲
 んだが、肩も横に、胸も横に、腰骨のあたりも横に、だるそうに
 手を組んだ、これで釣合いを取るのであらう。ただそのままでは
 根から崩れて、海の方へ横倒れにならねばならぬ。

肩と首とで、うそうそと、斜めに小屋を差覗さしのぞいて、

「ござるかいの、お婆さん。」

と、片頬夕日に眩まぶしそう、ふくれた片頬は色の悪さ、蒼あおざめて
 藍あゐのよう、銀色のどろりとした目、瞬またたきをしながら呼んだ。

駄菓子だかしの箱を並べた台の、陰に入つて踞しゃがんで居た、此方こなたの嫗おうなが
 顔を出して、

「主^{ぬし}か。やれもやれも、お達者でござるわや。」
と、ぬいと起^たつと、その紅糸^{べにいと}の目が動く。

十

来たのが口もあけず、咽喉^{のど}でものを云うように、顔も静^{じつ}と傾いたるまま、

「主^{ぬし}もそくさいでめでたいぞいの。」

「お天気模様でござるわや。暑^{あえ}さには喘^{あえ}ぎ、寒^{あえ}さには悩^{あえ}み、のう、時候よければ蛙^{かわず}のように、くらしの蛇^{あえ}に追^{あえ}われるに、この年になるまでも、甘露^{あえ}の日和^{あえ}と聞^{あえ}くけれども、甘い露^{あえ}は飲^{あえ}まぬわよ、ほ

ほほ、」

と薄笑いした、また歯が黒い。

「おいの、さればいの、お互たがに砂いの数ほど苦しみのたねは尽きぬ事いの。やれもやれも、」と言いなながら、斜めに立った廂ひさしの下、何を覗のぞくか爪つまだ立つがごとくにして、しかも肩腰は造りつけたものよう、動かざること如朽木くちきのごとし。

「若い衆しゅの愚痴ぐちより年よりの愚痴じや、聞く人も煩うるさかろ、措おかつしやれ、ほほほ。のう、お婆さん。主はさてどこへ何を志して出てござった、山かいの、川かいの。」

「いんにやの、恐しゆう歯がうずいて、きりきり鑿のみで抉えぐるようじや、と苦しむ者があるによつて、私わしがまじのうて進じようと、浜

へえいの針掘りに出たらばよ、獵師どもの風説うわさを聞かつしやれ。志す人があつて、この川ぞいの三股みつまたへ、石地蔵が建つというわいの。」

それを聞いて、フト振向いた少年の顔を、ぎろりと、その銀色の目しりめで流眊しりめにかけたが、取つて十八の学生は、何事も考えなかつた。

「や、風説うわさきかぬでもなかつたが、それはまことでござるかいの。」

「おいのおいの、こんな難ありがた有い奇特なことを、うっかり聞いてござる年とし紀ではあるまいがや、ややお婆さん。

主は気が長いで、大方何じやろうぞいの、地蔵様開かいげん眼が濟ん

でから、杖つえを突張つっぱつて参らしやます心じやろが、お互に年紀じやぞや。今の時世ときよに、またとない結縁けちえんじやに因よつて、半日も早うのう、その難ありがた有あい人のお姿ありがた拜ひつたもうと思ひつたうての、やらやつと重たい腰ひつたを引立ひつたてて出て来たことよ。「

紅糸べにいとの目はまた揺れて、

「奇特ありがたにござるわや。さて、その難ありがた有あい人は誰でござる。」

「はて、それを知らしやらぬ。主としたものは何ということぞいの。」

このさきの浜際おおちようじやに、さるの、大長者おおちようじやどのの、お別荘おおちようじやがござるてよ。その長者おおちようじやの奥様おおちようじやじやわいの。「

「それが御建立おおちようじやなされるかよ。」

「おいの、いんにやいの、建てさっしやるはその奥様に違いないが、ほつがん発願した篤こころざし志の方はまた別にあるといの。

聞かつしやれ。

その奥様は、世にも珍らしい、三十二相そろわしつた美しい方じやとの、はだ膚があたたかじやに困つて人間よ、冷たければ天女じや、と皆いうのじやがの、その長者どのの後うわなり妻じや、うわなりでいさつしやる。

よつてその長者どのとは、三十の上も年紀が違うて、男の児こ一人ござつて、それが今年十八じや。

奥様は、それ、ままはは継母いの。

きだて氣立のやさしい、ままこ膚も心も美しい人じやによつて、ままこ継母ままこ継児と

いうようなものではなけれども、なさぬなかの事なれば、万に一
 つも過あやまち失のないように、とその十四の春ごろから、行おこないの正しい、
 学のある先生様を、内へ頼みきりにして傍そばへつけておかしやつた
 。

二人は正にそれなのである。

十一

「よいかの、十四の年からこの年まで、四五六七八と五年の間、
 寝るにも起おきるにも附添うて、しんせつにお教えなすつた、その先
 生様のたんせいというものは、
 一ひととおり通の事ではなかつたとの。

その効かいがあつてこの夏はの、そのお子がさる立派な学校へ入らつしやるようになったに就いて、先生様は邸やしきを出て、自分の身体からだになりたいたいといわつしやる。

それまで受けた恩があれば、お客分にして一生置き申そうということなれど、宗旨々々のお祖師様でも、行ゆきたい処へ行かつしやる。無理やりに留めますことも出来んのでう。」

「ほんにの、お婆さん。」

「今度いよいよ長者どのの邸を出さつしやるに就いて、長い間御恩になった、そのお礼心というのじゃよ。何ぞ早や、しるしに残るものを、と云うて、黄金こがねか、珠玉たまか、と尋ねさつしやるとの。

その先生様、地蔵尊の一体建立して欲しいと言わされたとよ。

そう云えば何となく、かおかたち顔容も柔和での、石の地藏尊に似て

ござるお人じやそうなげな。」

先生は面おもてを背けて、笑えみを含んで、思わずその口のあたりを擦こすつたのである。

「それは奇特じや、小児衆こどもしゆの世話を願うに、地藏様に似さしつた人は、結構にござることよ。」

「さればその事よ。まだ四十にもならつしやらぬが、慾よくも徳も悟つたお方じや。何事があつても莞爾にこにこ々々とさつせえて、ついぞ、腹立たしつたり、悲しがらしつた事はないけに、何としてそのように難ありがた有たい気になられたぞ、と尋ねるものがあるわいの。

先生様が言わつしやるには、伝もない、教おしえもない。私わしはどうし

た結縁けちえんか、その顔色かおつきから容子ようすから、野中にぼんやり立たしましたお姿なり、心から地蔵様が氣に入つて、明暮あけくれ、地蔵、地蔵と念ずる。

痛い時、辛い時、口惜くちおしい時、怨めうらしい時、情なさけない時と、事どもが、まああつてもよ。待てな、待てな、さてこうした時に、地蔵菩薩ぞうぼさつなら何となさる、と考えれば胸も開いて、氣が安らかになることじゃ、と申されたげな。お婆さん、何と奇特な事ではないかの。」

「御奇特でござるのう。」

「じゃでの、何の心願というでもないが、何かしるしをといわるで思いついた、お地蔵一体建立をといわつしやる。

折から夏休みにの、お邸やしきじゆう中が浜の別荘へ来てじやに就いて、その先生様も見えられたが、この川かわぞい添そいの小橋きわの際きわの、蘆あしの中へ立てさつしやる事になつて、今日はや奥さまがの、この切通がけの崖がけを越えて、二つ目の浜の石屋かたが方かたへ行ゆかれたげじや。

のう、先生様は先生様、また難ありがた有あいお方として、浄財おたからを喜捨わかなされます、その奥様の事いの。

少わかい身みそらに、御奇特おほしめしな、たとえ御自分の心からではないとして、その先生様の思おぼしめし召まに嬉し喜んで従まわせえましたのが、はや菩薩みでしの御弟子みでしでましますぞいの。

七歳の童女とやらじや。

結縁けちえんしよう。年をとると気忙きせわしゆうて、片時もこうしてはお

られぬわいの、はやくその美しいお姿を拝もうと思うての。それで、はい、お婆さん、えッちらえッちら出て来たのじゃ。」

「おう、されば、これから二つ目へおざるかや。」

「さればいの、行くわいの。」

「ござれござれ。私も店をかたづけたら、路ばたへ出て、その奥

様の、帰らしやますお顔を拝もうぞいの。」

赤目の姫おうなは自から深く打うちうなず頷うなずいた。

十二

時に色の青い銀の目の姫おうなは、あいておとがい相手の頤かほにつれて、片がりながら、

さそわれたように頷いたが、肩を曲げたなり手を腰に組んだまま、足をやや横ざまに左へ向けた。

「かえり帰途のほどは宵月よいづきじゃ、ちらりとしたらお姿を見はずすまいぞや。かぶりものの中、気をつけさっしやれ。お方くらい、美しい、べに紅のついた唇は少ないとの。薄化粧にまぎ変りはのうても、はだ膚の白いがその人じゃ、浜方じゃでまぎ紛れはないぞの、よ可いか、お婆さん、そんなら私わしは行くわいの。」

「茶一つ参らぬか、まあい可いで。」

「預けましょ。」

「これはそまつ麩末なや。」

「お雑作でござりました。」

と齊ひとしく前へ傾きながら、腰に手を据えて、てくてくと片足ずつ、右を左へ、左を右へ、一ツずつ踏ふんで五足六足。

「ああ、これな、これな。」

と廂ひさしの夕日に手を上げて、たそがれかかる姿を呼べば、蘆あしを裾すそなる背うしろ影かげ。

「おい、」とのみ、見も返らず、ハタと留まつて、打傾いた、耳をそのまま言ことばを待つ。

「主ぬし、今のことをの、坂下の姉あねさまにも知らしてやらしやれ、さだめし、あの児こも拝みたかろ。」

聞きつけて、件くだんの嫗あね、ぶるぶると頭かぶりを掉ふつた。

「むんにやよ、年とし紀が上だけに、姉あねさまは御ご生しょうのことは抜から

ぬぞの。八丈ヶ島に鐘が鳴つても、うとい耳に聞く人じや。それに二つ目へ行かつしやるに、奥様は通り路。もう先刻さつきに拝んだじやろうが、念のためじや立寄りましよ。ああ、それよりかお婆さん、

と片頬かたほを青く捻ねじ向けた、鼻筋に一つの目が、じろりと此方こなたを見て光つた。

「主ぬし、数珠じゆずを忘れまいぞ。」

「おう、可よいとももの、お婆さん、主、そのえいの針を落さつしやるな。」

「御念には及ばぬわいの。はい、」

と言つて、それなり前途むこうへ、蘆を分ければ、廂ひさしを離れて、一人

は店を引込んだ。磯の風いそ一時ひとしきり、行くものを送つて吹いて、颯さつと返つて、小屋をめぐつて、ざわざわと鳴つて、寂然ひっそりした。吻々ほほほ吻と花やかな、笑い声、浜のあたりに遙はるかに聞ゆ。

時に一碗の茶を未だ飲干さなかつた、先生はツト心着いて、いぶかしげな目で、まず、傍かたわらなる少年の並んで坐つた背を見て、また四辺あたりをみまわしたが、月夜の、夕日に返つたような思いがした。

おうなことばかれ 嫗の言が渠を魅したか、その蘆の葉が伸びて、山の腰を蔽おほう時、みなそこ水底を船が漕いで、岡沙魚おかはぜというもの土に跳ね、豆蟹まめがにの穂末ほすえに月を見る状さまを、目のあたりに目に浮べて、秋の夜の月の趣に、いつか心の取られた耳へ、蘆の根の泡立つ音、葉末を風の戦そよぐ声、あたかも天地あめつちの眩つぶやき囁ささやくがごとく、我が身の上を語るのを、た

だ夢のように聞きながら、顔の地藏に似たなどは、おかしと現にも思つたが、いつごろ、どの時分、もう一人の嫗が来て、いつその姿が見えなくなつたか、定かには覚えなかつた。たとえば、そよそよと吹く風の、いつ来て、いつ歇んだかを覚えぬがごとく、夕日の色の、何の機に我が袖を、山陰へ外れたかを語らぬごとく。さればその間、およそ、時のいかばかりを過ぎたかを弁えず、月夜とばかり思つたのも、明るく晴れた今日である。いつの程にか、継棹も少年の手に畳まれて、袋に入つて、紐までちやんと結えてあつた。

声をかけて見ようと思う、嫗は小屋で暗いから、他の一人はそこへと見遣るに、誰も無し、月を肩なる、山の裾、蘆の寝姿

のみ。

「賢、」

と呼んだ、我ながら雉子きじのように聞えたので、眩せきばらいして、もう一度、

「賢君、」

「は、」

と快活に返事する。

「今の婆さんは幾歳いくつぐらいに見えました。」

「この茶店のですか。」

「いや、もう一人、……ここへ来た年寄が居たでしょう。」

「いいえ。」

「あれえ！ ああ、あ、ああ……」

恐こわかつた、胸むねが躍おどつて、圧おさえた乳房ちちうし重おもいよう、忌いまわしい夢ゆめから
 覚さめた。——浦うら子は、独ひとりり蚊帳かやうちの裡うち。身みの戦たたかくのがまだ留とどまねば、
 腕うでを組違くみちがえにしつかと両ふたの肩かたを抱かかいた、腋わきの下したから脈いを打うつて、
 垂たらたらつめた汗あせ。
 垂たらたらつめと冷ひやい汗あせ。

さよてもその夜よは暑あつかりしや、夢ゆめの恐おそ怖おそに悶もえしや、紅もみ裏うらの絹きぬ
 の搔かき卷まき、鳩つば尾おを迂すり退のいて、寝ね衣まの衣え紋もん崩くれたる、雪ゆきの膚はだえに
 蚊帳かやの色いろ、残ありあけ燈あかりの灯あかりに青あおく染そまつて、枕まくらに乱みれた鬢びんの毛けも、寝

汗にしとど濡れたれば、襟えり白粉おしろいも水かおりの薫かおり、身はただ、今しも藻も屑くずの中を浮び出でたかの思おもいがする。

まだ身体からだがふらふらして、床の途中にあるような。これは寝た時に今も変らぬ、別に怪しい事ではない。二つ目の浜の石屋が方かたへ、暮方仏像をあつらえに往いつた歸りを、厭いやな、不気味な、忌わしい、婆ばばのあらもの屋の前が通りたくなさに、ちようど満みち潮しおを漕こげたから、海松布みるめの流れる岩の上を、船で歸つて来たせいであらう。艚ろを漕いだのは銑せんさんであつた、夢を漕いだのもやつぱり銑せんさん。

その時は折おり悪あしく、釣船も遊山船ゆざんぶねも出払つて、船頭たちも、漁しじ、地曳びきで急いそがしいから、と石屋の親方が浜へ出て、小船せうちうを一艘

借りてくれて、岸を漕いでおいでなさい、山から風が吹けば、暈あを歩ある行くより確たしかなもの、船をひつくりかえそうたつて、海がが合がつて点んするものではねえと、大丈夫に承うけあ合あうし、銚太郎もなかなか素人離れがしている由、人の風説うわさも聞いているから、安心して乗つて出た。

岩の間をすらすらと縫つて、銚さんが船を持って来てくれる間、……私は銀の粉を裏うらごしにかけたような美しい砂地に立つて、足あしもと許もとまで藍あゐの絵具を溶いたように、ひたひた軽く寄せて来る、浪うしろに心は置かなかつたが、またそうでもない。先刻さつきの荒物屋が背後うしろへ来て、あの、また変な声で、御新姐ごしんぞさま様や、といいはしまいかと、大抵も氣を揉もんだ事ではない。……

婆さんは幾らも居る、本宅のお針も婆さんなら、自分に伯母が一人、それもお婆さん。第一近い処が、今内に居る、松やの阿おふく母ろだといって、この間隣村から尋ねて来た、それも年より。なぜあんなに恐ろしかったか、自分にも分らぬくらい。

毛虫は怪しいものではないが、一目見ても総毛立つ。おなじ事で、たとえば不気味だからといって、ちつとも怪しいものではないと、銚さんはいうけれど、あの、黄こがねいろ金色の目、黄きいろな顔、這はうあるるに歩行いた工合。ああ、思い出しても悚然ぞっとする。

夫人は搔卷すその裾さわに障さつて、爪つま尖さきからまた悚然ぞっとした。

けれどもその時、浜辺に一人立っていて、なんだか怪しいものなぞは世にあるものとは思えないような、気丈夫な考えのしたの

は、自分がたたくでいた七八間さきの、切立きつたてに二丈ばかり、沖から燃ゆるような紅くれないの日影もさせば、一面には山の緑が月に映つて、練ねりぎぬ絹を裂くような、柔やわらかな白浪しらなみが、根を一まわり結んじや解けて拵いがる、大きな高い巖いわの上に、水色のと、白びやくえ衣のと、水紅ときいろ色のと、西洋の婦人が三人。――

白衣のが一番上に、水色のその肩が、水紅色のより少し高く、一段下に二人並んで、指を組んだり、裳もすそを投げたり、胸を軽くそらしたり、時々楽しそうに笑つたり、話声は聞えなかつたが、さものんきらしく、おもしろそうに遊んでゐる。

それをまたその人々の飼犬らしい、毛色のいい、獵虎らつこのような茶色の洋犬かめの、口の長い、耳の大きなのが、浪際を放れて、巖いわの

根に控えて見ていた。

まあ、こんな人たちもあるに、あの婆さんを妖物ばけものか何ぞのよ
うに、こうまで恐がるのも、と恥かしくもあれば、またそんな人
たちが居る世の中に、と頼母たのもしく。……

と、浦子は蚊帳に震えながら思い続けた。

十四

ざんぶと浪に黒く飛んで、螺線らせんを描く白い水脚みずあし、泳ぎ出した
のはその洋犬かめで。

来るのは何ものだか、見届けるつもりであつたらう。

長い犬の鼻づらが、水を出て浮いたむこうへ、銚さんが艀ろをおしておいでだった。

うしろの小松原の中から、のそのそと人が来たのに、ぎよつとしたが、それは石屋の親方で。

草履ばきでも濡れさせまいと、船がそこつた間だけ、負おぶつてくられて、乗ると漕こぎ出すのを、水にまだ、足を浸したまま、鵜うのよばんうな姿で立って、腰のふたつ提さげの煙草たばこ入いれを抜いて、煙管きせると一所に手に持って、火皿をうつむけにして吹きながら、確かなもんだ確かなもんだと、銚さんの艀ろを誉ほめていた。

もう船が岩の間を出たと思うと、尖へった舳さきがするりと辻すべつて、波の上へ乗ったから、ひやりとして、胴まの間へ手を支ついた。

その時緑青色のその切立てきつたの巖いわの、渚なぎさで見たとは趣がまた違つて、亀の背にでも乗りそうな、中ごろへ、早薄うすもや靄かかが掛つた上から、白衣びやくえのが桃色の、水色のが白の手巾ハンケチを、二人で、小さく振つたのを、自分は胴うちの間に、半ば袖そでをついて、倒れたようになりながら、帽子ぼうしの裡うちから仰いで見た。

二つ目の浜で、地曳じびきを引く人の数は、水を切つた網あみの尖さきに、二筋黒くなつて砂山かけて遥はるかに見えた。

船は緑の岩の上に、浅あさぎき浅葱の浪を分け、おどろおどろ海草の乱るるあたりは、黒き瀬を抜けても過ぎたが、首くびきり沈しづんだり、またぶくりと浮ういたり、井桁いげたに組んだ棒の中に、生簀いけすがあちこち、三々五々かもめ。鷗かもめがちらちらと白く飛んで、浜の二階家のまわり縁を、

行きかいする女も見え、簾すだれを上げる団扇うちわも見え、坂道の切通しを、
俾くるまが並んで飛ぶのさえ、手に取るように見えたもの。

陸くがぢか近きづかなれば憂きづか慮かいもなく、ただ景色の好よさに、ああまで恐ろ
しかった婆ばばの家、巨おおでら刹やぶの藪やぶがそこと思なだう灘なだを、いつ漕いなぎ抜けた
か忘れていたのに、何を考え出して、また今の厭いなな年寄。……

——それが夢か。——

「ま、待つて、」

はてな、と夫人は、白うなじまくらき頸うなじまくらを枕まくらに着けて、おくれ毛けの音ねするま
で、がツくりと打うちかたむいたが、身わななの戦なくことなやお留やまず。

それとも渚はるあきの砂すなに立たつて、巖いわの上に、春はる秋あきの美うつくしい雲うみを見る
ような、三人の婦人きぬの衣きぬを見たのが夢か。海も空も澄あみ過あぎて、

薄霽うすもやの風情も妙たえに余る。

けれども、犬が泳いでいた、月の中なら兎うさぎであろうに。

それにしても、また石屋の親方が、水に亘たたずんだ姿が怪しい。

そういえば用が用、仏像を頼みに行くゆのだから、と巡礼じゆんれい染み

たも心嬉しく、浴衣がけで、草履で、二つ目へ出かけたものが、

人の背せなかで浪を渡つて、船に乗ろうとは思ひもかけぬ。

いやいや思ひもかけぬといえ、荒物屋の、あの老婆としより。通り

がかりに、ちよいとほんの燐枝マツチを買いに入つたばかりで、あんな、

恐ろしい、忌いまわしい不気味なものを、しかも昼間見ようとは、そ

れこそ夢にも知らなかつた。

船はそのためとして見れば、巖の婦人も夢ではない。石屋の親

方が自分を背負^{おぶ}つて、世話をしてくれたのも、銑さんが船を漕いだのも、浪も、鷗も夢ではなくなつて、やっぱり今のが夢であろう。

——「ああ、恐い夢を見た。」——

と肩がすくんで、裳^{もすそ}わなわな、瞳^{ひとみ}を据えて恐^{こわごわ}々仰^{あや}ぐ、天井の高い事。前後左右は、どのくらいあるか分らず、凄^{すご}くて^{みまわ}すことさえならぬ、蚊帳^{かや}に寂しき寝乱れ姿。

十五

果して夢ならば、海も同じ潮入りの蘆間^{あしま}の水。水のどこからか夢であつて、どこまでが事実であつたか。船はもう一^{ひとなみ}浪で、一

つ目の浜へ着くようになった時、ここから上つて、草臥れた足で
 また砂を踏ふもうより、小川尻おがわじりへ漕こぎ上あがつて、薦いの葉を一またぎ、
 邸やしきの背戸の柿の樹へ、と銚やさんの言つた事は——確たしかに今も覚えて
 いる。

艚ろよりは潮が押し入れた、川尻のちと広い処を、ふらふらと漕
 ぎのぼると、浪のさきが翻ひつて、潮の加減も点ひともし燈ともごろ。

帆柱が二本並んで、船が二艘そうかかっていた。舷ふなばたを横よこに通つて、
 急に寒くなつた橋の下、橋はし杭くいに水がひたひたする、隧トンネル道みちらし
 いも一思い。

石垣のある土手を右に、左にいつも見る目より、裾すそも近ければ
 頂もずつと高い、かぶさる程なる山を見つつ、胴たねぶくれに広くな

つた、湖のような中へ、他所よその別荘はねばしの芻橋ながれなかばが、流の半、岸近すな洲すへ掛けたのが、満潮みちしおで板も除のけてあつた、箱庭の電信ばしらかと思ふよう、杭がすくすくと針金ばかり。三角形さんかくなりの砂地が向うに、蘆の葉が一靡ひとなびき、鶴の片翼かたつばさ 見るがごとく、小松も斑ふに似て十本ともとほど。

暮れ果ともしてず灯は見えぬが、その枝の中を透あく青田越あおたごしに、屋根の高いはもう我が家。この小松の間を選んで、今日あつらえた地蔵菩薩じぞうぼさつを――

仏様でも大事な、氏神にして祭礼おまつりを、と銚さんに話しながら見て過ぎると、それなりに川が曲つて、ずつと水が狭うなる、左右は蘆びよが渺ようとして。

船がその時ぐるりと廻った。

岸へ岸へと支^{つか}うるよう。しまった、潮が留^{とま}つたと、銚さんが驚いて言った。船べりは泡だらけ。瓜^{うり}の種、茄子^{なす}の皮、藁^{わら}の中へ木の葉^{まじ}が交^{まじ}つて、船も出なければ芥^{あくた}も流れず。真水がここまで落ちて来て、潮^{さから}に逆^{さか}つて揉^もむせいで。

あせつて銚さんのおした船が、がツキと当^くつて杭^{つか}に支^{つか}えた。泡沫^{ぶき}が飛^ひんで、傾^{ふなばた}いた舷^へへ、ぞろりとかかつて、さらさらと乱れたのは、一^{ひとつ}束^{たばね}の女の黒髪、二巻ばかり杭に巻いたが、下には何が居るか、泥で分らぬ。

ああ、芥^{におい}の臭^{におい}でもすることか、海^み松^{まつ}布^ふの香^{かほ}でもすることか、船へ擲^{から}んで散^ちつたのは、自分^{おなじ}と同一^{びんみず}鬢^{みず}水^{みず}の……

——浦子は寝ながら呼吸を引いた。——

——今も蚊帳に染む梅花の薫^{かおり}。——

あ、と一声退^のこうとする、袖^{そで}が風^{かぜ}に取られたよう、向うへ引かれて、靡^{なび}いたので、此方^{こなた}へ曳^ひいて压^{おさ}えたその袖^{そで}に、と見ると怪しい針があつた。

蘆^{あし}の中に、色の白い瘦^やせた嫗^{おうな}、高家^{こうけ}の後室^{こうむろ}ともあろう、品の可^いい、目の赤^{あか}いのが、朦朧^{もうろう}と踞^{しゃが}んだ手^てから、蜘蛛^{くも}の囿^いか^かと見る糸^{いと}一^{ひと}条^{すじ}。

身悶^{みもだ}えして引切^{ひっき}ると、袖^{そで}は針^{はり}を外^{はず}れたが、さらさらと髪^{かみ}が揺^ゆれ乱^{みだ}れた。

その黒髪^{くろかみ}の船^{ふね}に垂^たれたのが、逆^{さか}に上^あへ、ひよろひよると頬^ほを掠^{かす}

めると思うと——（今もおくれ毛が枕に乱れて）——身体が宙に
 浮くのであった。

「ああ！」

船の我身は幻で、杭に黒髪おほの揃みながら、溺おほれていたのが自分
 であろうか。

また恐しい嫗の手に、怪しい針に釣り上げられて、この汗、そ
 の水、この枕、その夢の船、この身体、四角な室へやも穴あなめいて、膚はだえ
 の色も水の底、おされて呼吸いきの苦しげなるは、早や墳墓おくつきの中に
 こそ。呵呀あなや、この髪が、と思うに堪えず、我知らず、ハツと起き
 た。

枕を前に、翻かつた搔か卷まきを背せの力ちからに、堅いもののごとく腕かを解な

いて、密そとその鬢びんを搔かきあ上げた。我が髪ながらヒヤリと冷たく、褌つまに乱れた縮緬ちりめんの、浅葱あさぎも色の凄すこきまで。

十六

疲れてそのまま、搔かきま卷まきに頬ほをつけたなり、浦子はうとうととしかけると、胸の動悸どうきに髪が揺れて、頭かしらを上へ引かれるのである。「ああ、」

とばかり声も出ず、吃びつくり驚おどろしたようにまた起直った。

扱しご帯きは一層ひとしおしやらどけして、褌つまもいとどしく崩れるのを、懶ものうげに持て扱しごいつつ、忙せわしく肩で呼吸いきをしたが、

「ええ、誰も来てくれないのかねえ、私が一人でこんなに、」

と重たい鬚まげをうしろへ振って、そのまま仰のぎまに倒れそうな、身を揉もんで膝ひざで支えて、ハツとまた呼吸いきを吐つくと、トントンと岩に当って、時々崖がけを洗う浪。松風しんが寂しんとして、夜が更けたのに心着くほど、まだ一声も人を呼んでは見ないのであつた。

「松か、」

夫人は残あり燈あけに消え残る、幻のような姿で、蚊帳の中から女中を呼んだ。

けれども、直ぐに寐ね入いつたものの呼よび覚さまされる時刻でない。

第一（松、）という、その声が出たか、それとも、ただ呼んで見ようと心に思つたばかりであるか、それさえも現うつである。

「松や、」と言つて、夫人は我が声に我と我が耳を傾ける。胸のあたりで、声は聞えたようであるが、口へ出たかどうか、心こころも許とない。

まあ、口も利けなくなつたのか、と情なさけなく、心細く、焦つて、ええと、片手に左右の胸を揺ゆすつて、

「松や、」と、急せき調子でもう一度。

(松や、)と細いのが、咽喉のどを放れて、縁が切れて、たよりなくどこからか、あわれに寂しく此方こなたへ聞えて、遥はるか間まを隔はてた襖ふすまの隅で、人を呼んでいるかと疑われた。

「ああ、」とばかり、あらためて、その(松や、)を言おうとすると、溜ためいき息いきになってしまう。蚊帳あおが煽あおるか、衾ふすまが揺ゆれるか、畳

が動くか、胸が躍るか。膝を組み緊めて、肩を抱いても、びくびくと身内が震えて、乱れた褌つまもはらはらと靡なびく。

引ひ搦なんでまで、撫なでつけた、鬢びんの毛うるさが、煩うるさくも頬ほへかかつて、

その都度脈を打って血や通う、と次第はげに烈はげしくなるにつれ、上へ釣つられそうな、夢の針みぎわ、汀おの嫗な。

今にも宙へ、足が枕を離れやせん。この屋根の上に蘆あしが生えて、台所の煙けむ出しが、水面へあらわれると、芥溜ごみためのごみよどが淀よどんで、泡立つ中へ、この黒髪さかさが倒たぶさに、髻かから搦なまつていようも知れぬ。

あれ、そういえば、軒を渡る浜風が、さらさら水の流るる響ひびき。

恍惚うっとりと気が遠い天井へ、ずしりという沈んだ物音。

船がそこったか、その船には銚太郎と自分が乗って……

今、ふなべり 舳へ髪の毛が。

「あッ、」と声立てて、浦子は思わず枕許へすつくと立つたが、あわれこれなりに姫の針で、天井を抜けて釣上げられよう、とあるにもあられず、ばたり膝を支くと、胸を反らして、抜け出るさま状態に、もすそ裳を外。

蚊帳が顔へ搦んだのが、ぶん芬と鼻をついた水の香^{におい}。引き息で、がぶりと一口、おほ溺るるかと思んだ思い、これやがて気つけになりぬ。

目もようよう判然と、はつきり蚊帳の緑は水ながら、くれない紅の絹のへり、かくて珊瑚さんごの枝ならず。浦子は辛うじて蚊帳の外に、障子の紙に描かれた、胸白き浴衣の色、腰の浅葱あさぎも黒髪も、夢ならぬその我が姿を、ありあり歴然と見たのである。

十七

しばらくして、浦子は玉ぼやの洋燈ランプの心を挑あげて、明あかるくなったともし、宝石輝く指の尖さきを、ちよつと髻びんに触つたが、あらためてまた搔かきあ上げる。その手で襟を繕つて、扱帯しごきの下で褌つまを引合わせなどしたのであるが、心には、恐ろしい夢にこうまで疲労して、息づかいさえ切ないのに、飛んだ身体からだの世話をさせられて、迷惑であるがごとき思いがした。

且つその身体を棄すてもせず、老实まめやかに、しんせつにあしらうのが、何か我ながら、身だしなみよく、床ゆかしく、優しく、嬉しい

ように感じたくらい。

一つくぐつて鳩尾みずおちから膝ひざのあたりへずり下つた、その扱帯の端を引上げざまに、燈ともしを手にして、柳の腰を上へ引いてすらりと立つたが、小用こように、と思い切つた。

時に、障子を開けて、そこが何になつてしまつたか、浜か、山か、一里塚か、冥途めいどの路みちか。船虫が飛ぼうも、大きな油虫が駈かけ出そうも料られない。廊下へ出るのは気がかりであつたけれど、なおそれよりも恐ろしかつたのは、その時まで自分が寝て居た蚊帳やの内を窺うかがつて見ることで。

蹴出けだしも雪の爪尖つまさきへ、とかくしてずり下り、ずり下る寝衣ねまきの褌つまをおさえながら、片手で燈をうしろへ引いて、ぼツとする、肩越

のあかりに透かして、蚊帳を覗のぞこうとして、爪つまだ立つて、前髪をそつと差寄せては見たけれども、夢のために身を悶もだえた、閨ねやの内の、情なさけない状さまを見るのも忌いまわしし、また、何となく搔かまきまきが、自分の形に見えるにつけても、寝ていて、蚊帳を覗うかがうこの姿が透ひいたら、氣絶きしないでは済すむまいと、思おもわずよろよろと退すつて、引ひくるまゝもすあやうる裳もすあやう危あやうく、はらりと捌さばばいて廊下へ出た。

次の室へやは真ま暗くらで、そこにはもとより誰も居いない。

閨ねやと並なんで、庭を前に三間続つきの、その一室ひとまを隔へてた八畳に、銚太郎と、賢之助が一つ蚊帳。

そこから別に裏庭へ突き出でた角座敷の六畳に、先生が寝ねていはずる筈。

その方にも廁ほうはあるが、運ぶのかわやに、ちと遠い。

件の次くだんの明室あきまを越すと、取と着つつきが板戸になつて、その台所を越

した処ところに、松という仲なか働はたらき、お三と、もう一人女中が三人。

おんな
婦人ばかりでたよりにはならぬが、近い上に心安い。

それにちと間はあるが、そこから一目の表門の直ぐ内に、長屋

だちが一軒あつて、抱え車夫が住んでいて、かく旦那だんなが留守の折

からには、あけ方まで格子戸から灯あかりがさして、四五人で、ひそめ

くもの音。ひしひしと花ふだの響ひびきがするのを、保養の場所と大目

に見ても、好いいこととは思わなかつたが、時にこそよれ頼母たのもしい。

さらばと、やがて廊下づたい、踵かかとの音して、するすると、裳もすその気け

勢はいの聞ゆるのも、我ながら寂しい中に、夢から覚めたしるしぞ、

と心嬉しく、明室あきまの前を急いで越すと、次なる小室こべやの三畳は、湯殿に近い化粧部屋。これは障子が明いていた。

中うちから風も吹くようなり、傍わき正面しょうめんの姿見に、勿な、映りそ夢の姿とて、首垂うなだるるまで顔を背そむけた。

新しい檜ひのきの雨戸、それにも顔が描かれそう。真直まつすぐに向き直つて、衝つともしびと燈を差出しながら、突つきあたりへ辿たど々たどしゆう。

十八

ばかり、閉めた杉戸の音は、かかる夜ふけに、遠くどこまで響いたろう。

壁は白いが、真暗まつくらな中に居て、ただそればかりを力にした、

玄関の遠あかり、車夫部屋の例のひそひそ声が、このもの音にハ
 タと留やんだを、気の毒らしく思うまで、今夜こよいはそれが嬉しかった。
 浦子の姿は、無事に厠かわやうしろを背後にして、さし置いたその洋燈ランプの前、
 廊下のはずれに、媚なまめかしく露あらわれた。

いささか心も落着いて、カチンとせんを、カタカタとさるを抜
 いた、戸締り嚴重な雨戸を一枚。半ば戸袋へするりと開けると、
 雪ならぬ夜の白砂、広庭一面、薄雲の影を宿して、屋根を越した
 月の影が、廂ひさしをこぼれて、竹垣に葉かげ大きく、咲きかけるか、
 今、開くと、朝あしたの色は何々ぞ。紺くろに、瑠璃るりに、紅べにしほ絞しぼり、白に、
 水ときいろ紅色みずあさぎ、水浅葱つぼみ、苔あさがおなりの数は分らねども、朝顔形ちようずばちの手水鉢ちを、

朦朧もうろうと映したのである。

夫人は山の姿も見ず、松も見ず、松の梢こすえに寄る浪の、沖の景色にも目は遣やらず、瞳を恍惚うっとり見据えるまで、一心に車夫部屋の灯ともしを、遥はるかに、船の夢の、燈台と力にしつつ、手を遣ると、……柄ひしや杓くに障さわらぬ。

気にもせず、なお上うわの空で、冷たく瀬戸ものの縁を撫なでて、手をのばして、向うまで迄すべらしたが、指にかかる木この葉もなかつた。目を返して透かして見ると、これはまた、胸に届くまで、近くあり。

直ぐに取ろうとする、柄杓は、水の中をすすると、反対むこうまえに、山の方へ柄がひとりで廻った。

夫人は手のものを落したように、俯向いて熟と見る。

手水鉢と垣の間の、月の隈暗き中に、ほのぼのと白く蠢くものあり。

その時、切髪きりかみの白髪しらかみになつて、犬のごとく踞つくばつたが、柄杓やの柄に、瘦やせがれた手をしかとかけていた。

夕顔あおむの実に朱の筋の入つた状さまの、夢の梯おもかけをそのままに、ぼやりと仰向あおむけ、

「水を召されますかいの。」

というと、艶つややかな齒はでニヤリと笑む。

息とともに身を退ひいて、蹠よろ躑よろ々々と、雨戸にぴツたり、風に吹きつけられたようになって面おもてを背けた。斜はすツかいの化粧部屋の入

口を、敷居にかけて廊下へ半身。真まつくろ黒な影法師のちぎれちぎれな襪ばを被きて、茶色の毛のすくすくと蔽おほわれかかる額のあたりに、皺しわ手を合あわせて、真俯まうつむ向けに此方こなたを拝あんだ這身はいみの婆ばばは、坂下の藪やぶの姉あねさま様であつた。

もう筋も抜け、骨崩れて、裳もすそはこぼれて手水鉢、砂地に足ふを踏ふみ乱して、夫人は橋に廊下へ倒れる。

胸の上なる雨戸へ半面、ぬツと横まざまに突出したは、青ンぶくれの別の顔で、途端に銀色の眼まなこをむいた。

のさのさのさ、頭で廊下をすつて来て、夫人の枕に近づいて、ト仰いで雨戸の顔を見た、額に二つ金の瞳、真ま赤な口を横まざまに開けて、

「ふアはははは、」

「う、うふふ、うふふ、」と傾かたがつて、戸を揺ゆつて笑うと、バチヤリと柄杓を水に投げて、赤目の嫗おうなは、

「おほほほほ、」と尋常な笑い声。

廊下では、その握られた時氷のように冷たかった、といった手で、頬にかかった鬢びんの毛を弄もてあそびながら、

「洲すの股またの御前ごぜんも、山の峽かいの婆さまも早かったな。」というと、

「坂下の姉あねさま、御苦勞にござるわや。」と手水鉢から見越して言いつた。

銀の目をじろじろと、

「さあ、手を貸され、連れて行いにましょ。」

十九

「これの、吐く呼吸も、引く呼吸も、もうないかいの、」と洲すの股またの御前ごぜんがいえば、

「水くらわしや、」

と峡かいの婆ばばが邪じゃ慳けんである。

ここで坂下の姉様あねさまは、夫人の前髪に手をさし入れ、白き額を平手で撫なでて、

「まだじや、ぬくぬくと暖い。」

「手を掛けて肩を上げされ、私わしが腰を抱こうわいの。」

と例の横あるきにその傾いた形を出したが、腰に組んだ手はそのままなり。

洲の股の御前、傍より、

「お婆さん、ちよつとそのの針で口の端縫わつしやれ、声を立てると悪いわや。」

「おいの、そうじやの。」と廊下でいって、夫人の黒髪を両手でおさ圧さえた。

峡の婆、僅わずかに手を解き、頤おとがで襟を探つて、無ぶ性しょうらしく撮つまみ出した、指の爪つめの長く生伸はえのびたかに見えるのを、一つぶるぶると掉ふつて近づき、お伽とき話ばなしの絵えに描いた外科医者ていという体ていで、震おのく唇かすかに幽かすかに見える、夫人の白齒しらはの上を縫うよ。

浦子の姿は烈しく揺れたが、声は始めから得立てなかつた。目は睜みひらいていたのである。

「もう可よいわいの、」

と峽の婆、傍かたわらに身を開くと、坂の下の姉様は、夫人の肩の下へ手を入れて、両方の傍わきを抱いて起した。

浦子の身は、柔かに半ば起きて凭もたれかかると、そのまま庭へずり下りて、

「ござれ、洲の股の御前、」

といつて、坂下の姉様、夫人の片手を。

洲の股の御前も、おなじく傍かたわらから夫人の片手を。

ぐい、と取つて、引立ひったてる。右と左へ、なよやかに脇を開いて、

扱帯しごきの端が縁を離れた。髪まげの根は鬻うながら、笄こうがいながら、がツくりと肩に崩れて、早や五いつあし足ばかり、釣られ工合ちようざばちに、手水鉢てすいばちを、裏の垣根へ誘われ行く。

背後うしろに残つて、砂地に独り峽の婆くだん、件の手を腰に極きめて、傾かたがりながら、片手を前へ、斜ひとあおめに一ひと煽おり、ハタと煽ると、雨戸はおのずからキリキリと動いて閉しまつた。

二人の婆さしはさに挟さまれ、一いちにん人に導かれて、薄墨うしろの絵のように、潜くぐりもん門もんを連れ出さるる時、夫人の姿は後うしろざまに反つて、肩へ顔を

つけて、振返つてあとを見たが、名残惜しそうであわれであつた。

時しも一面の薄うすがすみ霞かすみに、処々つや艶あるよう、月の影に、雨戸は寂しんと連つらなつて、朝顔の葉を吹く風に、さつと乱れて、鼻紙がちらち

らと、蓮歩れんぽのあとのここかしこ、夫人をしとうて散ちりぢり々なり。

*

*

*

*

*

あと白浪しらなみの寄せては返す、渚長なぎさく、身はただ、黄なる雲を踏ふ
 むかと、裳もすそも空に浜辺を引かれて、どれだけ来たか、海の音のた
 だ轟ごうごう々と聞ゆるあたり。

「ここじや、ここじや。」

どしりと夫人の横よこたおし倒。

「来たぞや、来たぞや、」

「今は早や、氣随、氣ままになるのじやに。」

何処いずこの果か、砂の上。ここにも船の形の鳥が寝ていた。

ぐるりと三人、三みつ鼎がなえに夫人を巻いた、金の目と、銀の目と、

紅べにいと糸の目の六つを、凶あしき星のごとくキラキラと砂いさごの上に輝かし

たが、

「地藏菩薩祭れ、ふアふア、」と嘲笑あざわらつて、山の峽かいがハタと手

拍子。

「山の峽は繁はんじょう昌じやうじや、あはは、」と洲すの股またの御前ごぜん、足を挙げ

る。

「洲の股もめでたいな、うふふ、」

と北叟ほくそえ笑みつつ、坂下おきなの嫗おきなは腰ひねを捻ひねつた。

諸声もろごえに、

「ふアふアふア、」

「うふふ、」

「あはははは。」

「坂の下祝いませよ。」

今度は洲の股の御前が手を拍うつ。

「地藏菩薩祭れ。」

と山の峽が一足出る、そのあとへ臀いしきを捻ひねって、

「山の峽は繁昌じゃ。」

「洲の股もめでたいな、」とすらりと出る。

拍子を取って、手を拍うって、

「坂の下祝いませよ。」

据え腰で、ぐいと伸び、

「地蔵菩薩祭れ。」

「山の峽は繁昌じゃ、」

「洲の股もめでたいな、」

「坂の下祝いませよ、」

「地蔵菩薩祭れ。」

さす手ひく手の調子を合わせた、浪の調しらべ、松の曲。おどろおどろと月落ちて、世はただ霽もやとなる中に、ものの影が、躍るわ、躍るわ。

二十

ここに、一つ目と二つ目の浜境、浪間の巖を裾に浸して、
 路傍に衝と高い、一座螺のごとき丘がある。

その頂へ、あけ方の目を血走らして、大息を吐いてゐんだのは、
 狭島に宿れる鳥山廉平。

例の縞の襦衣に、その総の単衣を着て、紺の小倉の帯をぐるぐ
 ると巻きつけたが、じんじん端折りの空脛に、草履ばきで帽は
 冠らず。

昨日は折目も正しかつたが、露にしおれて甲斐性が無さそう、
 高い処で投首して、太く草臥れた状が見えた。恐らく驚破とい

つて跳ね起きて、別荘中、上を下へ騒いだ中に、襯衣を着けて一つ一つそのこはぜを掛けたくらい、落着いていたものは、この人物ばかりであろう。

それさえ、夜中から暁へ引出されたような、とり留めのないなり形かたちほか、他の人々は思いやられる。

銚太郎、賢之助、女中の松、なかばたらき仲働、抱え車夫はいうまでも

ない。折から居合わせた賭博ぶちなかま仲間の漁師も四五人、別荘を引ひっぶるつて、八方へ手を分けて、急に姿の見えなくなった浦子を捜しに駈かけ廻る。今しがた路を挟んだ向う側の山の裾を、ちらちらと靄もやに点ともれて、松たいまつ明の火の飛んだもそれよ。廉平がこの丘へ半ば攀よじ上った頃、消えたか、隠れたか、やがて見えなくなった。

もとより当あてのない尋ね人。どこへ、と見当はちつとも着かず、ただ足にまかせて、彼方かなた此方こなた、同じ処を四五度たびも、およそ二三里の路はもう歩行あるいた。

不祥な言を放つものは、曰いわく廁かわやから月に浮かれて、浪に誘われたのであろうも知れず、と即ち船を漕こぎ出いだしたのも有るほどで。

死んだは、活いきたは、本宅の主人へ電報を、と蜘蛛手くもてに座敷へ散り乱れるのを、騒ぐまい、騒ぐまい。毛色いっぴきのかわつた犬一疋いっぴき、においの高い総菜にも、見る目、鼻かの狭い土地おもかげがら、俵はかを夢に見て、山へ百合の花折りに飄ひようぜん然ぜんとして出かけられたかも料はかられぬを、狭島の夫人、夜半より、その行方ゆくえが分らぬなどと、騒ぐまいぞ、各おの自の。心して内分にお捜し申せと、独り押鎮めて制した

この人。

廉平とても、夫人が魚うおの寄るを見ようでなし、こんな丘へ、よもや、とは思つたけれども、さて、どこ、という目的めあてがないので、船で捜しに出たのに対して、そぞろに雲を攫つかむのであつた。

目の下の浜には、細い木が五六本、ひよろひよると風に揉もまれたままの形で、静まり返つて見えたのは、時々潮が満ちて根を洗うので、梢こずえはそれより育たぬならん。ちようど引潮の海の色は、煙の中に藍あゐを湛たたえて、或あるいは十畳、二十畳、五畳、三畳、真砂まぎいの床に絶えては連なる、平らな岩の、天地あめつちの奇くしき手に、鉄槌かなづちのあとの見ゆるあり、削りかけの鑪やすりの目の立つたるあり。鑿のみの齒形を印したる、鋸のこぎりくずの屑かけかけかと欠々かけかけしたる、その一つ一つに、白浪の

打たで翻るとばかり見えて音のないのは、岩を飾った海松、ところ、あわび、蠣かきなどいうものの、夜半よわに吐いた気を収めず、まだほのぼのと揺ぐゆらのが、渚なぎさを籠めて蒸すのである。

漁家二三。——深々と苫屋とまやを伏せて、屋根より高く口を開けたり、家より大きく底を見せたり、ころりころりと大畚おおびくが五つ六つ。

二十一

さてこの丘の根に引寄せて、一艘そとま苫を掛けた船があつた。海士あまも簣みのきる時雨かな、潮の※は浴びしぶきながら、夜露いとや厭う、ともの優

しく、よろけた松に小綱を控え、女男めおの波の姿に拈ひげて、すらす
 らと乾した網を敷寝みよしに、舳かたわらの口がすやすやと、見果てぬ夢の岩枕。
 傍かたわらなる苦屋の背戸に、緑を染めた青菜の畠、結び繞めぐらした蘆あしが。
 垣きも、船も、岩も、ただなだらかな面おもたいら平ひらに、空に躍った芻はね。
 釣つるべ瓶びんも、靄もやを放れぬ黒い線いとすじ。些さと凹凸みおろなく瞰下みおろささるる、かかる
 一枚の絵の中に、裳もすその端さえ、片袖かたそでさえ、美しき夫人の姿を、
 何処いずこに隠すべくも見えなかつた。

廉平は小さなその下界かみに対して、高く雲に乗ったように、円く
 靄もやに包まれた丘の上に、踏ふみはずしそうに崖がけの尖さき、五尺の地藏の像
 で立たったけれども。

頭こうべを垂たれて嘆息なげきした。

さればこの時の風采ふうさいは、悪魔の手に捕えられた、一体の善ぜん女よを救うべく、ここに天降あまくだった菩薩ぼさつに似ず、仙家の僕しもべの誤つて廬ろを破つて、下界おろに追おい下された哀れな趣。

廉平は腕こまぬを拱こまぬいて悄しょうぜん然ぜんとしたのである。時に海の上にひらめくものあり。

翼かの色の、鷗かもめや飛ぶと見えたのは、波に静かな白帆の片影。

帆風もやに散るか、露消えて、と見れば、海あらかわに露れた、一面おおい大なる岩の端へ、船はかくれて帆の姿。

ぴたりとついて留ひたりまつたが、翻然こなたと此方むきへ向をかえると、渚なぎさに据すわつた丘の根と、海なるその岩との間、離座敷の二三間、中に泉水たを湛さえた状さまに、路みち一条、東雲しのめのあけて行く、蒼空あおぞらの透く

ごとく、薄絹の雲左右に分れて、巖いわの面おもに靡なびく中を、船はただ動くともなく、白帆をのせた海が近づき、やがて横かろざまに軽くまた渚とまに止とまつた。

帆の中より、水際立みずあさぎつて、美しく水浅葱みずあさぎに朝露置いた大輪おおりんの花一輪、白砂の清き浜うてなに、台うてなや開くと、裳もすそを捌さばいて衝つと下り立つた、洋装したる一人の婦人。

よぼし夜干よぼしに敷いた網あたりの中を、ひらひらと拾とまつたが、朝景色を賞めずるよしして、四辺あたりを見ながら、その苦船とまぐねに立寄とまつて苦の上に片手をかけたまま、船の方を顧みると、千鳥なは啼なかぬが友呼ともびつらん。帆の白きより白びやくえ衣びやくえの婦人、水紅ときいろ色なるがまた一人、続いて前後に船を離れて、左右に分れて身軽に寄よつた。

二人は右の舷ふなばたに、一人は左の舷に、その苦船に身を寄せて、互たがいに苦を取つて分けて、船の中を差覗さしのぞいた。淡きいろいろの衣きぬの裳は、長く渚へ引いたのである。

廉平は頂の靄を透かして、足許を差覗いて、渠等かれら三人の西洋婦人、惟おもうに詭あつらえの出来を見に来たな。苦をふいて伏せたのは、この人々の註文で、浜に新造の短艇ボートでもあるのであろう。

と見ると二人の脇の下を、翻然ひらりと飛び出した猫がある。

トタンに一人の肩を越して、空へ躍るか、もう一匹、続いて舳へびきから衝つと抜けた。最後のは前脚を揃えて海へ一文字、細長い茶色の胴を一畝ひとつねり畝あざらしたまで鮮麗あざやかに認められた。

前のは白い毛に茶の斑まだらで、中のは、その全身漆のごときが、長

く掉ふつた尾の先は、舳みよしを掠かすめて失うせたのである。

二十二

その時、前後して、苦とまからいずれも面おもてを離し、はらはらと船を退のいて、ひたと顔を合わせたか、方向むきをかえて、三人とも四辺あたりをみまわたたずさましてイむ状みまわ、おぼろげながら判はつきり然と廉平の目に瞰みおろ下された。水浅葱みずあさぎのが立樹に寄つて、そこともなく仰いだ時、頂なる人の姿を見つけたらしい。

手を挙げて、二三度つづけ続つづぎまに磨さしまねくと、あとの二人もひらひらと、高たかく手巾ハンケチを掉ふるのが見えた。

要こそあれ。

廉平は雲を抱くがごとく上から望んで、見えるか、見えぬか、慌しく領き答えて、直ちに丘の上に踵を回らし、榮螺の形に切崩した、処々足がかりの段のある坂を縫って、ぐるぐると駈けて下り、裾を伝うて、衝と高く、ト一飛低く、草を踏み、岩を渡つて、およそ十四五分時を経て、ここぞ、と思う山の根の、波に曝された岩の上。

綱もあり、立樹もあり、大きな畚も、またその畚の口と肩ずれに、船を見れば、苦葺いたり。あの位高かつた、丘は近く頭に望んで、崖の青芒も手に届くに、婦人たちの姿はなかつた。白帆は早や渚を彼方に、上からは平であつたが、胸より高く踞まる、

海の中なる巖かげを、明石の浦の朝霧に島がくれ行く風情にして。かえつて別なる船一艘、ものかげに隠れていたろう。はじめここに見出されたが、一つ目の浜の方へ、半町ばかり浜のなぐれに隔つる処に、箱のような小船を浮べて、九つばかりと、八つばかりの、真黒な男の児。一人はヤツシと艫柄を取つて、丸裸の小腰を据え、圧すほどに突伏すよう、引くほどに仰反るよう、ただそこばかり海が動いて、舳を揺り上げ、揺り下すを面白そうに。穉い方は、両手に舳に掴まりながら、これも裸の肩で躍つて、だぶりだぶりだぶりだぶりと同じ処にもう一艘、渚に纏つた親船らしい、艫を操る児の丈より高い、他の舳へ波を浴びせて、ヤツシツシ。

いや、道草する場合でない。

廉平は、言葉も通じず、国も違つて便たよりがないから、かわつて処

置せよ、と暗示されたかのごとく、その苦船とまぶねの中に何事かある

ことを悟つたので、心しながら、気は急ぎ、つかつかと毛脛けずね長く

藁草履わらぞうりで立寄つた。浜に苦船はこれには限らぬから、確たしかに、上

で見つていたのをと、頂を仰いで一度。まずその二人が前に立つた、

左の方の舷から、ざくりと苦を上へあげた。……

ざらざらと藁が揺れて、広き額を差入れて、べとりと頤あごひげ髯ひげ一

面なその柔和な口を結んで、足をやや爪立つまだつたと思うと、両の肩

で、吃驚おどろきの腹を揉もんで、けたたましく飛び退のいて、下なる網つまずに躓

いて倒れぬばかり、きよとんとして、太い眉ひその顰ひそんだ下に、眼まなこを

円つづらにして四辺あたりを眺めた。

これなる丘と相對して、対むこうなる、海の面おもにむらむらと蔓はびこつた、鼠色の濃き雲は、彼処かしこ一座の山を包んで、まだ霽はれやらぬ朝靄あさもやにて、もの凄すさまじく空に沖ひひつて、焰ほのおの連つらなつて燃もゆるがごときは、やがて九十度を越えんずる、夏の日を海氣につつんで、崖に草なき赤あ地かちちへ、仄ほのかに反映するのである。

かくて一つ目の浜は彎わんにゆう入する、海にも浜にもこの時、人はただ廉平と、親船を漕こぎ繞めぐる長幼二人の裸はだかご児あるのみ。

得も言われぬ顔して、しばらく棒のごとく立つていた、廉平は何思いいけん、足を此方こなたに返して、ずつと身を大きく巖いわの上へ。

それを下りて、渚なぎさづたい、船ふねを弄もてあそぶ小児の前へ。

近づいて見れば、渠等かれらが漕こぎ廻る親船は、その舳じくを波打際。朝あ

凧さなぎの海、穩おだやかに、真砂まさごを拾うばかりなれば、纜もやいも結ただよばず漾たわせ

たのに、呑氣のんきにごろりと大の字形なり、楫かじを枕の邯鄲かんたん子、太い眉の

秀でたのと、鼻筋の通つたのが、真向まのけざまの寝顔である。

傍かたわらの船も、釋おさないものも、惟おもうにこの親の子なのであろう。

廉平は、ものも言わずに駈かけ歩あるいた声をまず調えようと、打う

咳ちしわぶいたが、えへん！ と大きく、調子はずれに響いたので、

襯衣しやつの袖口の弛ゆるんだ手で、その口許くちを蔽おおいながら、

「おい、おい。」

寝た人には内証らしく、低調にして小児こどもを呼んだ。

「おい、その兄さん、そっちの児こ。むむ、そうだ、お前達だ。上手に漕ぐな、甘いうまものだ、感心なもんじやな。」

声を掛けられると、跳はねあが上つて、船を揺ゆすること木の葉のごとし。

「あぶない、これこれ、話がある、まあ、ちよつと静まれ。

おお、伶俐りこう々々、よく言うことを肯きくな。

何なんじや、外じやないがな、どうだ余り感心したについて、もうちツと上手な処が見せてもらいたいな。

どうじや、ずツと漕げるか。そら、あの、そら巖のもつとさきへ、海の真まんなか中なかまで漕いで行ゆけるか、どうじやろうな。」

寄居虫やどかりで釣る小鮫こじぐほどには、こんな伯父おじいさんに馴染なじみのない、人馴れぬ里の児は、目を光らすのみ、返事はしないが、年紀としうえ上なのが、艚ろの手を止めつつ、けろりて、合点の目色めつきをする。

「漕げる？ むむ、漕げる！ 豪えらいな、漕いで見せなく。伯父さんが、また褒美をやるわ。」

いや、親仁おやし、何よ、お前の父とつさんか、父とつ爺さんには黙つてよ、父爺きに肯くと、危いいとか悪戯いたずらをするなどか、何とか言つて叱なられら。そら、な、可いいか、黙つて黙つて。」

というと、また合点がってん々々。よい、とお圧した小腕ながら艚ろをくろんぼす精巧な昆倫奴の器械のよう、シツと一声飛ぶに似たり。疾はやい事、但ただし揺れる事、中なに乗つた幼い方は、アハハアハハ、と笑つて跳

ねる。

「豪いぞ、豪いぞ。」

というのも憚り、^{はばか}たださしまねいて褒めそやした。小船は見る見る廉平の高くあげた手の指を離れて、岩がくれにやがてただ雲をこぼれた点となんぬ。

親船は他愛がなかつた。

廉平は急ぎ足に取つて返して、また丘の根の巖を越して、^{とまぶ}苦船に立寄つて、^{こなた}此方の船^{ふなぼた}舷を横に伝うて、二三度、同じ処を行つたり、来たり。

中ごろで、^{しゃが}踞んで^{びく}畚の陰にかくれたと思うと、また^{つた}突立つて、端の方から^な苦を撫でたり、上からそつと叩きなどしたが、更にあ

ちこちをみまわして、ぐるりと舳へさきの方へ廻つたと思つたと、向うの舩ふなばたの陰になつた。

苦がばらばらと煽あおつたが、「ああ」と息の下に叫ぶ声。藁わらを分けた艶えんなる片袖、浅葱あさぎの褌つまが船からこぼれて、その浴衣そめの染、その扱帯しごき、その黒髪も、その手足も、ちぎれちぎれになつたかと、砂に倒れた婦人おんなの姿。

二十四

「気を静めて、夫人おくさん、しつかりしなければ不可いません。落着いて、可いいですか。心を確たしかにお持ちなさいよ。

判りましたか、私です。

何も恥かしい事はありません、ちつとも極きまりの悪いことはあり
ませんです。しつかりなさい。

御覧なさい、誰も居ないです、ただ私一人です。鳥山たった一
人、他ほかには誰も居おらんですから。」

海の方を背そびらにして安からぬ状さまに附添った、廉平の足許さかに、見得
もなく腰を落し、裳もすそを投げて崩折くずおれつつ、両袖りょうそでに面おもてを蔽おおうて、ひ
たと打泣くのは夫人であつた。

「ほんとうに夫おくさん人、氣を落着けて下さらいんでは不可いけません。突い
然きな海へ飛込もうとなすつたりなんぞして、串じょうだん戲ごではない。

ええ、夫おくさん人、心たしかが確たしかになつたですか。」

声にばかり力を籠めて、どうしようにも先は婦人、ひとえに目を見据えて言うのみであつた。

風そよそよと呼呼吸するよう、すすりなきの袂が揺れた。浦子は涙の声の下、

「先生、」と幽にいう。

「はあ、はあ、」

と、纔かに便を得たらしく、我を忘れて擦り寄つた。

「私、私は、もう死んでしまいたいのでございます。」

わつとまた忍び音に、身悶えして突伏すのである。

「なぜですか、夫人、まだ、どうかしておいでなさる、ちゃんとなさらなくつては不可んですよ。」

「でも、あなた貴下、私は、もう……」

「はあ、どうなすった、どんなお心持なんですか。」

「先生、」

「はあ、どうですな。」

「私が、あの、海へ入って死のうといたしましたのより、あなた貴下は、もつとお驚きなさいました事がございましょう。」

「……………」

何と言おうと、黙って唾つを呑のむ。

「私が、私が、こんな処に船の中に、寝て、寝て、」

と泣いじやくりして、

「寝かされておりましたのに、なお吃びっ驚くりなさいましてしょうね

え、貴下。」

「……ですが、それは、しかし……」とばかり、廉平は言うべき術^{すべ}を知らなかった

「先生、」

これぎり、声の出ない人になろうも知れず、と手に汗を握ったのが、我を呼ばれたので、力を得て、耳を傾け、顔を寄せて、

「は、」

「ここは、どこでございます。」

「ここですか、ここは、一つ目の浜を出端^{ではず}れた、崖下の突^{とつばずれ}端

の処ですが、」

「もう、夜があげましたのでございますか。」

「明けたですよ。明方です、もう日が当るばかりです。」

聞くや否や、

「ええ！」とまた身を震わした。浦子はそれなり、腰を上げて立とうとして、ままならぬ身をあせつて、

「恥かしい、私、恥かしいんですよ。先生、どうしましょう、人が見ます。人が来ると不可いけません、人に見られるのは厭いやですから、どうぞ死なして下さいまし、死なして下さいましよ。」

「と、ともかく。ですからな、夫おくさん人、人が来ない内に、帰りましょう。まだ大して人ひと通とおりもないですから。疾はやく、さあ、疾く帰ろうではありませんか。お内へ行って、まず、お心をお鎮めな

さい、そうなさい。」

浦子は烈しく頭を掉つた。

二十五

為^せん術^{すべ}を知らず黙つても、まだ頭^{かぶり}をふるのであるから、廉平は茫然^{ぼうぜん}として、ただ拳^{こぶし}を握つて、

「どうなさる。こうしていらしつては、それこそ、人が寄つて来るか分かりません。第一、捜しに出ましたのでも四人や八人ではありません。」

言^いいも終^はらず、あしずりして、

「どうしましょう、私、どうしましょうねえ。どうぞ、どうぞ、

あなた
 貴下、一思いに死なして下さいまし、恥かしくつても、死骸しがいにな
 れば……」

泣くのに半ば言消えて、
こととき

「よ、後生ですから、」

も曇れる声なり。

心弱くて叶かなうまじ、と廉平はやや屹きつとしたものいいで、

「飛んだ事を！ 夫人おくさん、廉平がここに居おるです。決けして、決け
 て、そんな間まちがい違ちがはさせんですよ。」

「どうしましょうねえ、」

はツと深く溜息ためいきつくのを、

「……………」

ただ咽喉のどを詰めて熟じつと見つ、思わず引き入れられて歎息した。廉平は太い息して、

「まあ、貴女あなた、夫人おくさん、一体どうなさった。」

「訳を、訳をいえば貴下あなた、黙って死なして下さいますよ。もう、もう、もう、こんな汚けがらわしいものは、見るのも厭いやにおなりなさいますよ。」

「いや、厭になるか、なりませんか、黙って見殺しにしましょうか。何しろ、訳をおっしゃって下さい。夫人おくさん、廉平です。人について悪い事なら、私は盟ちかつて申しませんです。」

この人の平生はかく盟うのに適していた。

「は、申します、先生、貴下あなただけなら申します。」

「言うて下さるか、それは難^{ありがた}有^いい、むむ、さあ、承^{うけたま}りましよう。」

「どうぞ、その、その前^{さき}に先生、どこへか、人の居^いない、谷底か、山の中か、島へでも、巖^{いわ}穴^{あな}へでも、お連れなすつて下さいまし。もう、貴^{あなた}下^{くだ}にばかりも精一杯、誰にも見せられます^{からだ}身体^{からだ}ではないんです。」

袖^{わぜか}を僅^{わず}に濡^ぬれたる顔、夢見るように恍^う惚^とと、朝ぼらけなる醉^す芙蓉^{いふよう}、色^{いろ}をさました涙の雨も、露に宿^{とど}つてあわれである。

「人の来^きない処^{ところ}といつて、お待ちなさい、船^{ふね}でもどちらへか、」
と心^{こころ}当^ありがないでもなかつた。沖^{おき}の方^{かた}へ見^みえ初^{はじ}めて、小兒^{こども}の船^{ふね}が霧^{もや}から出^でて来^きた。

夫人は時にあらためて、世に出たような目まなざししたが、苦船とまぐねを一目見ると、目まぶちへ、颯さつと——蒼あおざめて、悚然ぞつとしたらしく肩をすくめた、黒髪おもげに、沖かたの方。

「もし、」

「は、」

「参られますなら、あすこへでも。」

いかにも人は籠こもらぬらしい、物もの凄すさまじき対岸むこうの崖、炎を宿めいめいして冥々めいめいたり。

「あんな、あんなその、地獄の火が燃えておりますような、あの中へ、」

「結構なんでしょうございます、」と、また打うち悄しおれて面おもてを背ける。

よくよくの事なるべし。

「参りましようか。靄が霽はれば、ここと向い合つた同一おなじような崖下でありますけれども、途中が海で切れとるですから、浜づたいに人の来る処ではありません。

御覧なさい、あの小児こどもの船を。大丈夫こ漕ぐですから、あれに乗せてもらいましょう、どうぞです。」

夫人は、がツくりして頷うなずいた、ものを言うも切なそうに太いたく疲労して見えたのである。

「夫人おくさん、それでは。」

「はい、」

と言つて礼心に、寂しい笑顔して、吻ほっと息。

二十六

「そんな、そんな貴女あなた、詰つまらん、怪けしからん事があるべき次第わのものではないです。汚けれた身体からだだの、人に顔は合わされんのお言いなさるのはその事ですか。ははははは、いや、しかし飛んだ目にお逢あいでした。ちつとも御心配はないですよ。まあ、その足をお拭ふきなさい。突然こんな処へ着けたですから、船を離れる時、酷ひどくお濡ぬれなすつたようだ。」

廉平は砥とに似あて蒼あおき条すじのある滑なめかな一な座めの岩の上に、海に面して見すばらしく踞しゃんだ、身にただ襦しや衣つを纏まとえるのみ。

船の中でも人目を厭いとつて、紺がすりのその単衣ひとえで、肩から深く包くんでいる。浦子の蹴出けだしは海の色、巖端いわばなに蒼澄あおずみて、白脛しらはぎも水に透くよう、倒れた風情に休らえる。

二人は霽もやの薄模様。

「構まわんですから、私の衣服きものでお拭ぬきなさい。

何、寒くはないです、寒いどころではないですが、貴女、裾すそが濡ぬれましたで、気味きが悪いでありますよ。」

「いえ、もう潮うしほに濡ぬれて気味きが悪いなぞと、申まされます身体からだではありません。」と、投げたように岩の上。

「まだ、おっしやる！」

「ははは、」と廉平は笑い消きしたが、自分にも疑ういの未いまだ解とけぬ、

蘆あしの中なる幻影まぼろしを、この際なれば気けもない風で、

「夢の中を怪しいものに誘い出されて、苦船とまぶねの中で、お身体を……なんとという、そんな、そんな事がありますものかな。」

「それでも私、」

と、かかる中にも夫人は顔を赧あからめた。

「覚えがあるのでございますもの。貴下あなたが気をつけて下すつて、あの苦船の中で漸々ようよう自分の身体になりました時も、そうでした、……まあ、お恥かしい。」

といいかけて差俯さしうつむ向く、額に乱れた前髪は、齒かにも嚙かむべく怨めうらめしそう。

「ですが、ですが、それは心の迷いです。昨日きのうあたりからどうか

なきつて、お身体からだの工合が悪いのでしよう。西洋なぞにも、「

ことは言の下に聞き咎とがめ、

「西洋とおっしゃれば、貴下あなたは西洋の婦人おんなの方が、私のつかまつておりました船の中を覗のぞいて見て、仔細しさいがありそうに招いたのを、丘の上から御覧なすつて、それでお心着きになりましたつて。

その時も、苦を破つて獣が飛んで行つたとおっしゃるではございませんか。

ですから私は、「

と早や力なげに、なよなよとするのであつた。

「いや、」

と当あてなしに大きく言つた、が、いやな事はちつともない。どう

して発見みいだしたかを怪しまれて、湾の口を横ぎつて、穉兒おきなごに船を

漕こがせつつ、自分が語つたは、まずその通とおり。

「ですけども、何ですな。」

「いいえ」

今度は夫人から遮つて、

「もう昨日きのう、二つ目の浜へ参りました途中から、それはそれは貴あ下なた、忌いまわしい恐ろしい事ばかりで、私は何だか約束ごとのように存じます。

三十という年に近いこの年になりますまで、少わかい折から何一つ苦勞といふことは知りませんで、悲しい事も、辛い事もついで覚えはありません、まだ実家には両親も達者で居ます身の上ですも

の。

腹の立った事さえござんせん、余り果報な身体からだですから、盈みつれ
 ば虧かくるとか申します通り、こんな恐しい目に逢いましたので。
 唯ただいま今ここへ船を漕いでくれました小児こどもたちが、年こそ違います
 けれども、そつくり大きいのが銚さん、小さい方が賢之助にに肖に
 おりましたのも、皆私みんなの命数で、何かの因縁なんでございませよ
 うから。」

いふことの極めて確かに、心狂える様子もないだけ、廉平は一ひ
 層慰としおめかねる。

夫人はわずかに語るうちも、あまたたび息を継ぎ、

「小児こどもと申してもまま継しい中で、それでもきょうだい姉弟とも、ほん真の児と

も、賢之助は可愛くツてなりませぬ。ただ心にかかりますのはそれだけです、それも長年、あなた貴下が御丹精下さいましたお庇かげで、

高等学校へ入学も出来ましたのでございますから、きつと私の思いでも、一人前になりましたよう。

もう私は、こんな身体からだ、見るのも厭いやでなりません。ぶつぶつ切つて刻んでも棄すてたいように思うんですもの、ちつとも残り惜おしいことはないのですが、慾よくには、この上の願ねがいには、これが、何か、義理とか意気とか申すので死ぬんなら、本望でございますのに、

活いきながら畜生道とはどうした因果なんでございませうねえ。」

と、心もやや落着いたか、先のように泣きもせで、濁りも去

つた涼しい目に、ほろりとしたのを、熟じっと見て、廉平堪たまりかねた

面おももち色して、唇をわななかし、小鼻に柔しわ和な皺を刻んで、深く両

手こまぬを拱あいたが、噫あ、我わがかつて誓うらく、いかなる時にのぞまんと

も、我わが心、我が姿、我が相好、必ず一体の地蔵のごとくしかくあ

るべき也なりと、そもさんか菩薩ぼさつ。

「夫おくさん人、どうしても、貴女あなた、怪あやしい獣に……という、疑うたがいは解けん

ですか。」

「はい、お恥かしゆう存じます。」と手を支ついて、誰たれにか詫わび入

る、そのいじらしさ。

まなこ
眼を閉じたが、しばらくして、

「恐るべきです、恐るべきだ。夢現ゆめうつの貴女あなたには、悪獣あくじゆうの

体たいに見えましたでありましょう。私の心けだものは獣でした。夫人おくさん、懺ざ

悔んげをします。廉平が白状するです。貴女に恥辱を被らしたものは、

四脚よつあしの獣ではない、獣のような人間じゃ。

私です。

鳥山廉平一生の迷いじゃ、許して下さい。」と、その襯衣しやつばかりの頸うなじを垂れた。

夫人はハツと顔を上げて、手をつきざまに右視左瞻とみこうみつつ、背せなに乱れた千筋ちすじの黒髪、解すくべき術すべもないのであった。

「許して下さい。お宅へ参つて、朝夕、貴女あなたに接したのが因果で

す。賢君に対して殆んど^{ほと}献身的に尽したのは、やがて、これ、貴女に生命を捧げていたのです。

未だ^{いま}四十という年にもならないで、御存じの通り、私は、色気もなく、慾気もなく、見得もなく、およそ出世間的に超然として、何か、未来の靈光を認めておるような男であつたのを御存じでしょう。

なかなか^{もっ}以て、未来の靈光ではなく、貴女のその美しいお姿じやつた。

けれども、到底尋常では望みのかなわぬことを悟つたですから、こんど当地の別荘をおなごりに、貴女のお傍^{そば}を離れるに就いて、非常な手段を用いたですよ。

五年勤勞に酬むくいるのに、何か記念の品をと望まれて、悟さとも徳もなく、いながら、ただ仏体を建てるのが、おもしろい、工合のいい感じがするで、石地藏を願いました。

今の世に、さような変つたことを言い、かわつたことを望むものが、何……をするとお思いなさる。

廉平は魔法づかいじゃ。」

と石上に跏ふざ坐したその容貌ようぼう、その風采ふうさい、或はしかあるべく見えるのであつた。

夫人は、ただもの言わんとして唇のわななくのみ。

「貴女あなたも、昨日きのう、その地藏をあつらえにおいで途中から、怪しいものに憑つかれたとおっしゃつた。……

すべて、それが魔法なので、貴女を魅して、ゆめうつつ 夢 現きようの境に乗じて、その 妄もうしゆう 執しゆうを晴しました。

けれども余りに痛いたわしい。ひとえに獣にとお思いなすつて、玉のごときそのお身体からだを、砕いて切つても棄すてたいような御容ごようす子が、余りお可哀相かわいそうで見えておられん。

夫人おくさん、真の獣よりまだこの廉平と、思おぼし召めいす方が、いくらもお心が済むですか。」

夫人はせいせい息を切つた。

「どうですか、余り推おしつけがましい申もうしぶん分ぶんではありますが、心はおなじ畜生でも、いくらか人間の顔に似た、口を利く、手足のある、廉平の方が可いいですか。」

口へ出すとよりは声をのんで、

「あなた貴下、」

「……………」

「貴下、」

「……………」

「貴下、ほんとうでございますか。」

「勿論、懺悔ざんげしたのじゃで。」

と、眉を開いてきつぱりという。

膝ひざでじりりとすり寄って、

「ええ、嬉しい。貴下、よくおつしやって下さいました。」

としつかと膝に手をかけて、わツとまた泣きしずむ。廉平は我ながら、訝あやしいまで胸がせまった。

「私と言われて、お喜びになりますほど、それほどの思おもいをなさつたですか。」

「いいえ、もう、何ともたとえようはございません。死んでも死骸しがいが残ります、その獣の爪つめのあと舌のあとのあります、毛だらけなはだ膚が残るのですもの。焼きましても狐狸きつねねきの悪い臭においがしましうかと、心残りがしましたのに、貴下あなた、よく、思い切つてそうおつしやって下さいました。快よく死なれます、死なれるんでございま

すよ。」

「はてさて、」

「……………」

「じゃ、やっぱり、死ぬのを思い止まっちゃ下さらん。」

顔を見合わせ、
うちうなず
打 頷き、

「むむ、成程、」

と腕を解いて、廉平は 従 容 しょうよう として居直った。

「成程、そうじゃ。貴女 あなた ほどのお方が、かかる恥辱をお受けなさ

つて、夢にして、ながらえておいでなさる筈 はず ではないのじゃった。

懺悔をいたせば、悪い夢とあきらめて、思い直して頂けること

もあろうかと思っただですが、いかにも取返し からだ のつかんお身体にし

たのじやった、恥入ります。

夫人、おくさん貴女ばかりは殺しはせんのだじや。」

「いいえ、飛んだことをおつしやいます。殿方には何でもないの
でございませぬもの、そして懺悔には罪が消えますと申します、お
怨うらみには思いません。」

「許して下さいるか。」

「女の口から行き過ぎゆぎではございませぬが、」

「許して下さいる。」

「はい、」

「それではどうぞ、思い直して、」

「私はもう、」

と衝つと前まえ棲づまを引寄せる。岩の下を搔かいくぐつて、下の根のうつろを打つて、絶えず、丁トントン々と鼓の音の響いたのが、潮や満ち来る、どツと烈はげしく、ざぶり砕けた波がしら、白しらたき滝さかしまを倒さつに、颯とばかり雪を崩して、浦子の肩から、頭つむりから。

「あ、」と不意に呼い吸きを引いた。濡れしおたれた黒髪に、玉のつらなる雫しずくをかくれば、南無三浪なむさんに攫さらわるる、と背せなを抱くのに身を恁もたせて、観念かんげんした顔かほの、気高きまでに莞爾にっこりとして、

「ああ、こうやって一思いに。」

「夫おくさん人、おくれはせんですよ。」と、顔につららを注いで言った。打返しがまたぎつと。

「※しぶきがかかる、※しぶきがかかる、危いぞ。」

と、空から高く呼とほわる声。

靄もやが分れて、海うなづら面に兀こつとして聳そびえ立つた、巖いわつづぎの見上ぐ

る上。草蒸す頂に人ありて、目の下に声を懸けた、樵夫きこりと覚しき

ひとりひとりの親仁おやし。面長く髪おもての白きが、草色の針目衣はりめぎぬに、朽葉色くちばいろの

裁着たつつけ穿はいて、草鞋わらんじを爪反りつまぞや、巖端いわばなにちよこなんと平胡坐ひらあぐら

かいてぞいたりける。

その岩おもの面におもひたとあてて、両手でちようごしごし一挺ちようの、きらめく

刃物を悠々と磨といでいたり。

磨とぎつつ、覗のぞくように瞰下みおろして、

「上へ来さつしやい、上へ来さつしやい、浪に引かれると危いわ

」。

という。浪は水晶の柱のごとく、倒さかしまにほとぼしって、今つツ立
 った廉平の頭上を飛んで、空ぎまに攀よずること十丈、親仁の手許
 の磨ぎ汁を一洗滌ひとあらい、白き牡丹ぼたんの散るごとく、巖角いわかどに翻ひつて、
 海面うなづらへぎつと引く。

「おじご、何を、何をしてござるのか。」と、廉平はわざと落着
 いて、下からまず声を送った。

「石鑿いしのみを研ぐよ。二つ目の浜の石屋に頼まれての、今度建立さ
 っしやるという、地藏様の石を削るわ。」

「や、親仁御おじごがな。」

「おお、此方衆こなたしゆはその註文のぬしじやろ。そうかの。はて、道
 理こそ、婆々ばばどもが附まき纏とうぞ。」

婆々と云うよ、生死しやうじを知らぬ夫人の耳に、鋭くその鑿をもつて抉えぐるがごとく響いたので、

「もし、」と両膝をついて伸び上った。

「婆ばばとお云いなさいますのは。」

「それ、銀目と、金目と、赤い目の奴等やつらよ。主達ぬしたちが功德での、

地藏様が建つたが最後じゃ。魔物め、居処いどころがなくなるじゃで、さ

まざまに崇たりおつて、命まで取ろうとするわ。女子衆おなごしゆ、心配さ

つしやんな、身体からだは清いぞ。」

とて、鑿のみをこつこつ。

「何様それじゃ、昨日きのうから、時々黒雲の湧わくように、我等の身体を包みました。婆というは、何ものでござるじやろう。」と、廉

平は揖ゆしながら、手を翳かざして仰いで言った。

皺しわ手に呼吸いきをハツとかけ、斜ちようめに丁と鑿ちようを押えて、目一杯に海を望み、

「三千世界じゃ、何でも居ようさ。」

「どこに、あの、どこに居ますのでございますえ。」

「それそれそこに、それ、主たちの廻りによ。」

「あれえ、」

「およそ其奴等そいつらがなす業じゃ。夜一夜踊りおつて騒々しいわ、畜生ども、」

とハタと見るや、うしろの山に影大きく、眼まなこの光爛らんらん々として、知るこれ天宮の一将星。

「動くな！」

と喝かつする下に、どぶり、どぶり、どぶり、どぶり、と浪よ、浪よ、浪よ
渦うずくよ。

同時に、衝つとその片手を挙げた、掌たなごころの宝刀、稲妻の走るがごとく、射て海に入いるぞと見えし。

矢よりも疾はやく漕寄こぎよせた、同じ童わらべが艫ろを押して、より幼ちごき他の児と、親船に寝た以前さきの船頭、三体ともに船あに在り。

斜めに高く底見ゆるまで、傾いた舷ふなべりから、二人半にん身を乗り出いだして、うつむけに海を覗のぞくと思つと、鉄くろがねの腕いなわらび、蕨あざの手、二条の柄いたがすつくと空、穂尖ほさきを短みじかに、一斉みつまたに三叉ほこの戟ほこを構えた瞬間、暈あやおよそ百余ひゃくご畳、海一面に鮮からくれない血。

見よ、南海に巨人あり、富士山をその裾に、大島を枕にして、
斜めにかかる微妙の姿。青嵐あおあらしする波の彼方かなたに、莊嚴そうごんなるこ
と仏のごとく、端麗なること美人に似たり。

怪しきものの血潮は消えて、音するばかり旭あさひの影。波を渡るか、
宙ゆを行くか、白き鷺がちょう鳥の片翼かたつばさ、朝風に傾く帆かげや、白びやく
衣え、水紅色ときいろ、水浅葱みずあさぎ、ちらちらと波に漏れて、夫人と廉平が
イめる、岩山の根の巖いわに近く、忘るるばかりに漕ぐ蒼空あおぞら。魚うお
り、一尾ふなぼた舷はたに飛んで、鱗うろこの色、あたかも雪。

ⅡⅡ篇中の妖婆ようばの言葉（がぎぐげご）は凡てすべ、半濁音にてお

読み取り下されたく候 〓 〓

明治三十八（一九〇五）年十二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成⁴」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第九卷」岩波書店

1942（昭和17）年3月30日発行

※誤植の確認には底本の親本を参照しました。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年11月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

悪獣篇

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>